



再撰

花洛名勝圖會

東山之部

二



猫墳 田中里 野川御所 沸々
 百萬遍知恩寺 本堂 觀音堂 勢至堂 經藏 法華社 經碑
 法然上人塔 中御門 日野 廣揚家 其外伏見城 善導院 地藏堂
 戰死諸將墓石 付室 松屋 觀
 後二條院陵 二軀石佛 白河 上栗田
 栗田山莊 淨土寺古蹟 十禪師社 西方院舊跡
 銀閣慈照寺 庭佛 殿 東求堂 二層高岡 萬松院殿塔
 慈照寺山城 池 名指石 築水 鹿谷法然院 濟堂 地藏堂 佛石
 表門 阿音塔 安樂寺 本堂 住蓮安樂三而階 松出 釜虫 兩尺塔 善氣水 佛守祠 經藏
 圓城寺舊跡 靈鑑寺殿 神護寺舊蹟 大豐明神社
 同古蹟 鹿谷 葵谷 如意藏 如意藏
 魏王祠 手石巖 樓門瀧 池地藏
 中尾山城跡 七月十六日夕大文字送火

東阜春望

遊東山者多入夜歸去
是以雅昼携提灯

東山三月櫻花地布幔
 羅旌蔽伯陵 蠢僕往來
 何所有提爐提合又提

灯

右石丈山翁
霞翳集所載

應需

書博士公



聖衆來迎山禪林寺

南禪寺の北に隣る浄土宗西山流西谷派徳本山無量壽院と号し

本堂 西向 阿彌陀佛

長三又余立像見返の相なり世々見くろの本尊と号し

脇檀 左 水觀律師

立像長一尺二寸許 右 浄土曼荼羅 鐘樓 本堂南傍あり

祖師堂

本堂の北にあり南向中央善導大師立像二尺三寸許自作

鎮守春日社

祖師堂の北にあり影向 來迎松 本堂の前ふあり松樹の上よ菩薩

悲田梅

來迎松の南ふあり長明菴心集ふ云水觀律師とありあり年々念佛の

菩提樹

祖師堂の傍ふあり 經藏 石階の下ふあり切経と藏む 方丈 經藏の

講堂

此の傍ふあり 學寮 講堂の前左右ふあり 行場 講堂の

清和帝御塔

後三條帝御塔 方丈の東南墓地の上壇ふあり二間四面ありの冠合と

九重の塔あり

此塔は後三條帝の御塔と云ふ也 清和帝の御塔は此塔の北にあり

山と白川將軍地蔵山と云ふ

此山は白川將軍の御塔と云ふ也 山と白川將軍地蔵山と云ふ

山と白川將軍地蔵山と云ふ 山と白川將軍地蔵山と云ふ

三代實錄曰元慶四年十月四日癸未申二刻太上天皇崩於圓覺寺時春秋三十一

詔火葬於中野不起山陵使百官及諸國不舉哀停素服亦勿任緣葬之諸司

表事所須惣從省約七日丙戌夜酉四刻奉葬太上天皇於山城國後右郡上栗田山奉

置御骸於水尾山上 又後三條帝御火葬於櫻林寺北の方鹿ヶ谷村ふあり路傍の左ふあり山王塚と

扶桑畧記曰延久五年五月七日庚戌太上天皇春秋四十崩十七日庚申葬於神

樂丘東原六月廿二日甲午於圓宗寺被修七々御法事

皇年代私記曰延久五年五月十七日葬神樂岡南原安置御骨於禪林寺

云是依方忌暫奉安置也於山

松平定綱侯塔

右同所の中種ふあり伊勢國桑名城主松平越中守定綱侯をり

松平直留侯塔

同所ふあり越前國大野の城主松平但馬守直留侯をり

鶯池

并天池の東ふあり 茶室 并天池の南ふあり

當山の其始東山進士藤原朝臣関雄

能書たり 山莊たりと

文德天皇齊衡年間弘法大師の法孫真紹僧都んとり佛刹を開基



春の
 正裕
 春日
 正裕
 春日
 正裕

春日
 正裕
 春日
 正裕

春日
 正裕
 春日
 正裕



永観堂
 禅林寺

東山二
 四



弘法大師自作の座像の跡陀と本尊今傳授堂に安じと云故に初め真言宗第二世宗叡僧正後入唐僧正又四覺寺僧正智證後左京の人池上氏なり後依給ひ遂に貞觀五年九月六日定額と一を禪林寺と賜ふ則勅願所なり茲より十二世の間任職を詳せば但馬守國孫進士入道國經の子なり今本堂の願躬本尊と云永觀寺持の儀次く任職これ住住其後弟永觀律師今本堂の願躬本尊と云永觀寺持の儀次く任職三論の碩匠たり時小毎日佛前今本堂の願躬本尊と云永觀寺持の儀次く任職唱へ或は行道念佛声と惜まれば然り小永保二年二月十日の晨例の如衆僧と共に行道念佛せり小奇異や跡陀佛檀より下り共小行以律師信感のあまり暫く乾の方小向や躊躇せん本尊尤を顧眄永觀遲言を斯く其後面貌遂に復らば律師感涙と流し是偏小末世の衆生を撰取引接の證鑑なりと自ら其由縁を記され此像を以て本尊と云件今本堂の願躬本尊と云永觀寺持の儀次く任職の義小より堂と永觀堂と云又來迎山と稱する寛治二年九月八日の夜永觀律師声と將々念佛と唱ふ事至信なり時小忽ち光明赫然と

聖衆來迎 星の如く庭前の松樹の上小集會仁和以て山号始也茲より代々を重ね相續仁和曾く池の大納言の息靜遍僧都仁和寺の住源空の滅後小撰擇集と披閱一向專修の義と立源實朝公仁和是を依給ひ武運長久の祈禱の爲小般若經を轉讀其例池を行而後西山證空上人の徒弟西谷淨音和尚今尚住職今尚大西山流を興隆盛小浄土宗を弘今尚此當山中興浄土の開祖なり一説小駒の僧正道智も亦斯寺住今尚住昔の地小北禪林寺南禪林寺西寺あり後小北の宇を除き禪林寺と改今尚南禪寺と号し今尚禪林寺小山家秋曉と云心と云僧也

後撰
若ゆけは今尚の中今尚尾上の庵今尚三つり 源頼家

新拾遺
禪林寺今尚 前律師 永觀

正東山若王子 永觀堂の北小隣天台宗聖護院官院家兼々院と号し
熊野權現社 南向 本宮今尚 神樂殿 四社の傍今尚 蛭子社 併殿の傍今尚

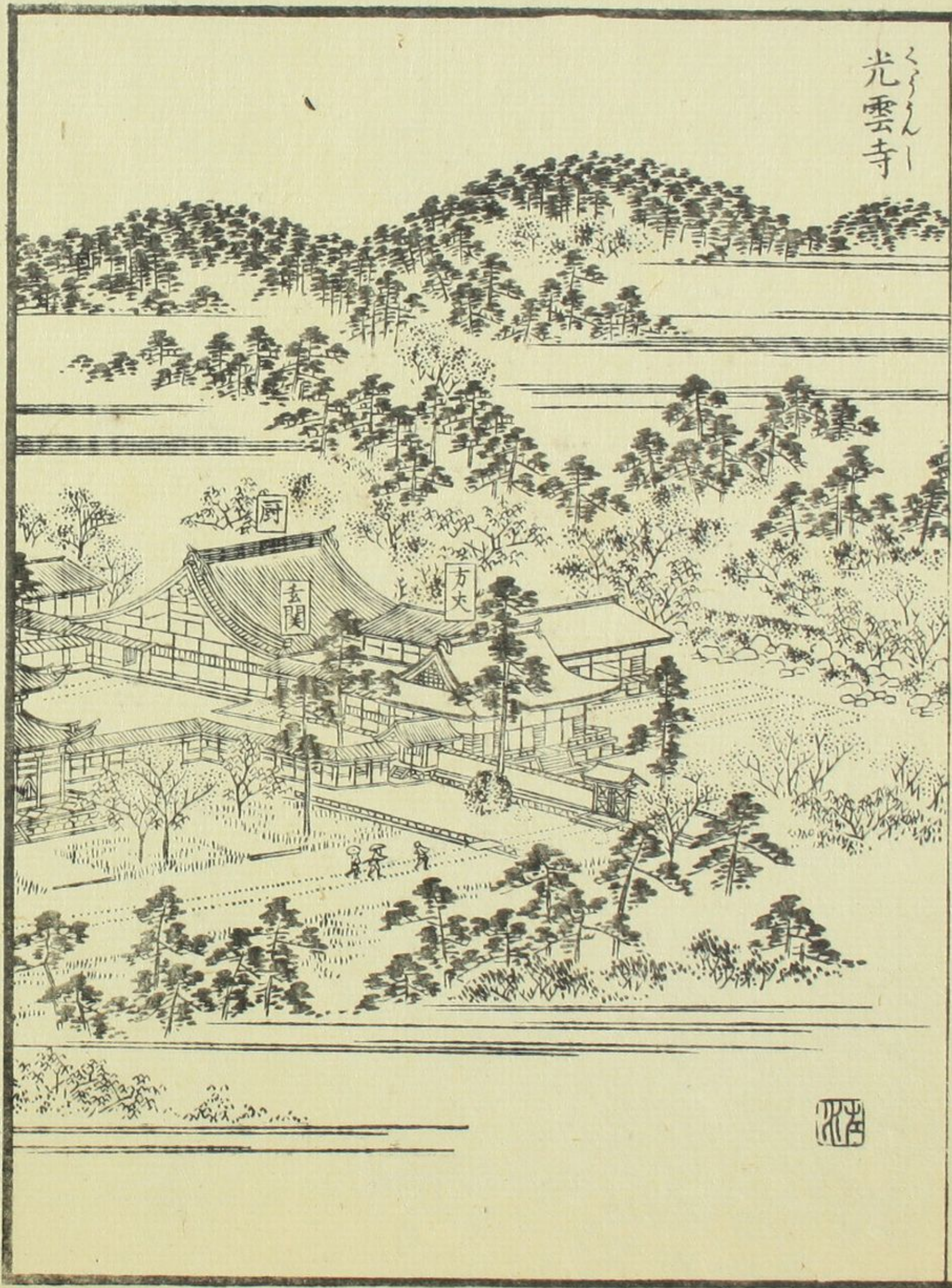
本地堂 拜殿の東あり西百十手十面如意輪等の観音三尊を安置し
并小花山法皇及佛前三所の観音の尊影を納むる洛陽順礼堂一番の札所也
祖師堂 本地堂の南に隣り役行者
神聖菩薩と祭る **大護摩壇** 祖師堂の前地上より例年四月七日
九月十八日大護摩修行あり
鳥居 南向額 **熊野大権現** 聖護院道親王筆 **榎本稻荷祠** 鳥居の
向あり
御禊瀧 祖師堂の
東あり **辨財天祠** 日滝の奥
山腹あり **金峯山祠山神祠** 共弁天祠の
傍あり
醉花臺 辨天祠の北あり山中
隨一の美草あり **玉鏡池** 醉花臺の
西あり **如意輪瀧** 弁天祠の前道あり
三の滝と云
秋錦舎 醉花臺の奥あり
花洛一望有る徳景 **素練瀧** 翠陰瀧
傍あり **翠陰瀧** 共秋錦舎の
傍あり
看滝舎 右日所の
上あり **甘露滝** 日上
看滝舎の
下あり **屏風岩** 看滝舎の
下あり
千手滝 山上あり
瀑云滝と云 **千手堂** 滝の傍あり
觀音と安置 **十二面瀧** 千手滝の
第一の滝と云
稻荷社 北の山上あり **妙見社** 稻荷祠の
下あり **延年臺** 妙見祠の傍あり
南華頂山西の
洛中松岡に望み
頗る風景の地あり
瑞雪亭 延年臺の下あり
此地也 **嬌鶯軒** 迎月居
榎本稻荷祠の
傍あり
 當社熊野大権現ハ後白河法皇紀州熊野三所権現を渴仰の御志願
 深くまじり三十三度の御幸あり猶も敷信ののまじり洛陽三所を移し給
 るの敷慮あり處々の靈場をトし給ふ然るも當山ハ王城鎮護の台山獄の

南中々山中十三の滝あり自ら神妙の靈地也其法皇敷感斜を以て即
 當山と那智と定め永曆年中紀州那智山の土砂を運ぐも権現を勧請し
 給ふ所なり皇居の正東小在を以て正東山と稱し熊野権現の若宮女一
 王子の神名ふりて若王子と号し往昔ハ後白河上皇臨時の御幸台慢
 ちく月御諸司歩み運ひ繁花の地中々神殿美飾とを樓門迴廊
 祭義の殿宇備えたり足利尊氏公殊小権現小歸仰大僧正良海を以て
 座主とす尔後聖護院門主の先達とせり又當山ハ今より花の名所
 小々寛正六年三月四日將軍義政公御花見あり花頂山より若王子小
 御成あり雜掌ハ細川右京大夫勝元これを勤むり古記に見えたり其余
 林五鳳集も若王子の花を看る歌と詠む事或載たり然るも應仁の兵亂
 より此邊軍士の屯たり故敷荒蕪及びたるも近來信心の徒古昔を慕ひ梅
 櫻楓等を数株寄栽し神社佛閣を再營し山中虫風流の亭舎をまつ其美
 觀を増やして四時の佳境なり小勝信心の参詣遊宴の騷人墨客常小閑断を

游光雲禪寺觀紅葉
 小春真個小春華佳兼丹楓
 秋後霞葉光流葉如非葉花
 色欺花不是花倒影池中紅
 湧水掃塵庭上白敷沙艷若
 湯宜醉斯景豈唯蒙頂火前
 茶
 春樵隱士



光雲寺



東山二九



神室と称しこれと崇む銚の剣銘あり云

表 祇園新宮 裏 永享十一年の月日

社記云夫當社の神寶大鷹銚八人皇八十代 高倉天皇御宇兼安

二年辰六月十四日祇園御靈會を太上天皇御覽ありと御沙汰あり

々々豫より諸國の末社小觸ありせし隙結構を模様兼保の

例の外小屏銚山崎の定銚大舍人の空鷲銚岡崎の大鷹銚安古陀

銚を初く白河銚小つたつと諸國の末社より出り所の銚をくく六

十六本又造山八捲舞舞跳銚笠車小舍人雜色を加へ天下無双の

祭式とあり是犬鷹銚の盪觴あり其後二百六十六年を経く百三代

後花園院の御宇永享十一年己未六月十日御敬神の餘り小命令汝

社司小下し錢七千匹を賜ひ兼安の銚を修理せしを給へ夫より後

岡崎の住人等若少男女輕財を同志小集り兼安の銚を摸し新造り

出し祭禮小樹兼安の銚ハ神庫小納め今小存在せりト云

東本願寺懸所

右門所の西下隣本尊阿彌陀佛 照檀親鸞聖人教如上人の影像と
左右に掛る本堂庫裏役所桑所あり近年修造あり美觀なり

地藏堂

右門所の西下あり崇福寺と俗草の地藏といふ瘡毒を患ふ者祈願まじ

天王御旅所

同所の西道の西側あり九月十六日祭禮の時東天王の神輿より渡御

元應寺古趾

右小云東側の地あり當寺の後醍醐天皇の御願所なり

應仁記云以寺と申は後宇多天皇の御願所なり龍の御手小錦の簀持土壇と

築せり十三橋頭ありと云

雍州府志云傳信和尚の開基なり第二世兼意和尚の時戒壇頂の地より而し山口より

掘出觀音

同所西側あり元禄年間北の方の竹藪の内より古井よりありと云

親鸞屋敷

同所西側の北竹林の地あり一畝あり政所小五劫庵よりあり親鸞上人

夢倉藥師堂

東天王の西南あり夢倉山法雲寺より傳教大師の開基と云或は僧正行基

加茂明神の級依佛の藥師の小像を以て其像の内小と云

本堂 西向 藥師佛 座像一尺余 服士二天子 十二神将 本尊の厨子の

當寺は往昔下賀茂郷夢倉の里あり一年洪水漲り出り堂宇おひ佛龕

漂流し延勝寺の邊止る則ち堂を其流止る所小建立然と云も狭ひ

あるふより又今の岡崎村小移り斯地ハ三井寺圓滿院の領地なり

花園房能僧正別當たり今岡崎小在と云々も世ふ莫多倉の薬師と称は
 此事詳ふ中山定親卿の薩戒記に見えたり又云應永卅二年八月四日今日
 内臣七人御躬御祈のため七佛薬師小詣は
 満願寺右薬師堂の南あり法華宗示現山や号は往昔弘長の頃蓮祖吉田や神道傳授の時寄宿の地なり元禄年中建立用基町上人の折開眼し一州番神の灵像あり
 本堂西向 法華首題牌釋迦牟尼佛 袒師堂江戸堀の内分身の袒像と云は鎮元隆筆又天祥の袒師大覚大僧正の作
 文子天神社堂前の北側あり菅公即自作當寺の鎮守なり其初め北野より後世社壇并殿所造り
 鐘樓本堂の南 閼伽井堂前南あり是法勝寺の閼伽井也
 法勝寺舊蹟同村あり法勝寺の一頁あり六法東の大廈なり
 曼荼羅堂小塔院不動堂鐘樓經藏惣社山王二重塔八十六間廻廊南大門西門
 北門寺魏々たり 應仁記云堂八間四間南面小池殿あり云々
 法勝寺の塔成座主良真慶の導師其層九級也云々
 中興の祖は慈威上人や天台浄土宗を兼學は此人東坂本西教寺を草創り當寺
 應仁小七びく後金堂の本尊薬師佛ハ西教寺よりついで云々
 塔壇當村の西北一町ありあり 五大堂塔の壇西三十間あり黒谷道の東側あり方十間余の芝生あり中標の木三株あり土人三本木と称れ惣く此辺諸堂の旧跡や々々時々田畑より佛器金具等を掘出せし
 附伽井ハ前より満願寺の境内に存り

太平記云康永元年三月廿日小岡崎の在所より俄に失火出来り頓々
 燒靜了々々が繞り細煙一燃々遙小飛去り法勝寺の塔の上落留る
 初め燈籠の火の如く消もせし燃もせざるが乾たる檜は小燒付り
 黒々たり天を焦り燒より白河院の御建立あり一靈地たりされを
 堂舎の構善盡し美盡せり本尊の飭は金箔鏤り玉を琢く中八角
 九重の塔婆へ横堅と云ふ八十四丈あり重々小金剛九會の曼荼羅を安置
 三國無雙の雁塔を始り造出さし時天竺の無熱池震旦の昆明池
 我朝の難波の浦小其影寫る見えたる事こそ奇特なりと云々
 俊寛屋敷同村東の藪の中あり法勝寺の執行俊寛僧都の住せし跡ありと云又中岡崎村小侍童有玉の宅地と云所あり後人の附會せるや不審
 系標のけりり小法勝寺と云々
 風雅
 立よ〜〜〜を思ふと系標〜〜〜花の本の〜
 家集
 拾芥抄云六勝寺法勝寺尊勝寺圓勝寺東勝寺成勝寺延勝寺都合六箇寺なり
 今成勝寺の趾ハ東三條の北白川橋の東より延勝寺の趾ハ法勝寺の旧跡の西よりあり

今青蓮院の宮の家臣ありて其家名ゆゑ土地の名ありて有るべし
十禪師の社の鳥居條ありて鳥居大路といふ其鳥居大路に在りて人故の家名を鳥居
大路と号するなり其地名をとりて新字にす其本邦の例ありて新田正利
織田明智の地名なり

東三條社

右往還の西の方ふ二堆の丘あり本光寺の正西ふあり九二間半許四百高五尺許
傳云近衛院の御宇東三條の森の方より黒雲一むら左來りて御殿の上へ

覆へ必ひ帝おひきせ給ひたり依り源賴政鳴絃の術を以て其化鳥を退
治し御感を蒙りてより平家物語に見えたり此故世人鶴の森と呼びたり

鶴のりり者むらむ村々ふ一帯志ざる郎々う非

景樹 常矩

東三條殿古趾

右同所の垣あり今其所詳かり

保元物語云新院の御方の武士東三條に籠居り或は山上に登り木の枝に
居り姉小路西洞院内裏高松殿を窺ひ目より聞えり保元元年七月
三日夜野守義朝お仰せく東三條の留主小候ふ女監物藤原満貞并武士
二人召捕り子細を問る云來十日左大臣流罪の由定め申さる謀叛の事

既露頭お依りたり其故左府東三條にお有僧を籠り秘法を行はせ

内裏を呪咀し奉らり由聞えり下野守義朝お仰せく其身を召されり

東三條殿お行向く見り小門を閉り敵も明け依り西表の南の小門をお破り
入りぬ角振隼の社の前を過り千巻の泉の前にお壇を立ち行僧あり相摸の

法鏡山妙傳寺

二條川東町の東北の隅あり法華宗壇城日意上人の開闢甲州身延山天竺
冥寶山と云ふ又當山身延山と云ふ冥地を以て西の身延と稱す

阿闍梨勝尊と三井寺の住侶あり女數多寄取り是と搦り中畧伴法
法烏瑟沙摩金剛童子小天狗と聞えり新院御謀叛の事頭と云

本堂 西向 中央法華首題牌 釋迦佛 日蓮上人像 座像二又許其をとも上京
日惠上人靈夢と云ふ 廟堂 本堂の後あり正法華院の額を掲げ高祖日蓮大士の
七面明神堂 本堂の西北の傍あり中央七面明神を祀る 大黒堂 本堂の北傍あり

當寺の開山日意上人其初め庵山ふありて天台の學徒を政宗と本山
身延の中興日朝上人の廣學お飯り徒弟をあり夫より高祖の靈骨城
分ち七面の神跡寺と都小勸請九重の身延山と當寺を建立せり

往古創建の地へ上京あり中古西洞院綾小路今妙傳寺の辺に近る一介後
秀吉公の命によりて京極の二條に移り後世又今の地よりなり

能師蒼虬翁墓

傳云蒼虬翁八田氏中加州の藩中高祿の士たり天性大量相負雄偉や若きより
引馬の道なきもめたり能諧をたしむる南無菴あり後退隱
入りの後師が終焉あり遺言あり東山芭蕉堂とす南無菴あり自然小の
風雅の道の中興よりせしむる成たりと歎き万葉集のむきとす能諧小正風は
眼をいれ俗諺平話を音成たり都鄙小言能諧小正風は卒去の後
門下の高弟あり能諧小正風は野卑とす能諧小正風は卒去の後
下より流石能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
た一辭を傳ふるの能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
の眞浴あり尾張加賀小松指き能諧小正風は卒去の後
祖翁が用發の能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
本意を達する能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
能の能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
改ため目前平話の正風能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
あり天保十三壬寅能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
二条のひ能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
名能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後
仰き称能諧小正風は其門葉支流能諧小正風は卒去の後

西方寺

妙傳寺の南西側あり淨土宗知恩院末願海山と号し旧八両替町春日の南
西方寺町あり後世に小移り
本尊 阿弥陀佛 額 聖額 西方寺 大炊御門元大臣經宗公筆
本堂の傍に衣通地蔵と称し尊像をまつ小堂額成就諸人多し
来由寺あり今こ小畧せり

宋の戸を左右へ明く蒼虬
昔や去年の初蒼虬
瘡のこゑ田蒼虬
つら蒼虬
度蒼虬
五月蒼虬
静蒼虬
お蒼虬
ゆ蒼虬
よ蒼虬

大炊御門一家塔

當寺あり 徑宗公より以後多し

小野寺秀和母墓

日墓地あり 石面勸云

轉學院法室妙輪大姉

元禄五年九月廿一日 小野寺内母壽九十三

播州赤穂の城主浅野内匠頭長矩家臣小野寺十内秀和の母川丸左衛門の娘なり

九十歳の時伊藤仁斎より東涯父子詩と作これと賀其集小見えり

小野寺一族墓

石面勸云 又以南野寺十内秀和壽六十一

又以串劔信士 小野寺十内秀和壽六十一

又風岷劔信士 岡野金右衛門包秀壽二十四

又同逸劔信士 大高源吾 忠雄 壽三十二

元禄十六年未年二月 小野寺十内妻丹建之

此墓石の秀和の妻丹女の建る所なり 幸右衛門の子なり 岡野包秀大高忠雄は十内の甥なり 大石内蔵助良雄は後日年六月十八日本国寺中了覚院より自滅す 當西方寺の小野寺の檀寺なり 丹女の傳詠亦あり 汲原集一名人の撰とす 小野寺 於洛陽之部小載はれ 爰小畧し

起倒流劔法之祖堀田佐五右衛門墓

日所あり 銘文を彫り 延享中 小建る所なり 今猶諸国の流末の士より誦せり云

聞名寺

同所東側あり 大炊道場舊京極大炊御門あり 故小斯号く又其姑ハ一條あり 或ハ一條道場と称し 時宗藤沢小属に

本尊阿弥陀佛

立像三尺許

延命地藏尊 堂前の庫中安置

光孝天皇塔

堂前あり 七層の石塔 波多より高サ二回あり 故あり 建る

秋野道場

寺内あり 称名寺と号し 乃ハ南都あり 聖徳太子の草創なり 中古ニ条鳥九あり 後又移り 乃ハ天台宗たり 改め時宗より

香川宣阿法師墓

墓所あり 又景新 景平 黄中 并 景樹 翁夫妻 其佗香川家代々の墓碑あり

師名ノ亮真後宣阿と号す

大梅月堂と云 周防岩國吉川家の老臣

たり 故あり 退身ノ京師小来り 然れども 猶君侯より厚く俸を賜ふ

と云 薙髪ノ清水谷實藤卿の門下入和歌を研究し 終ハ一家哉

たり 其統今小昌を居を洛の一條トハ故ハ世ハ一條の今西行と

称し 享保二十年九月廿二日 歿し 葬世あり 墓面小彫り

本尊 花紅紫月堂の尊

眼界無邊 一心豁然 清風渡水 明月懸天

大恩寺

同所あり 淨土宗 百万遍小属に

本尊 阿弥陀佛

一尊あり 厩基ハ及公天阿上人 慈覺大師作 洛陽四十八願所巡の

教安寺

同所あり浄土宗

本尊阿弥陀佛

右同作立像二尺五寸 同順并河

寂光寺

同所あり法華宗

本尊阿弥陀佛

同所あり法華宗勝流空中山と号し開基久遠院日湖上人

信長寺

同所あり浄土宗

本尊阿弥陀佛

信長公の時當寺中本國坊の僧第沙の弟子宰相開基小精

專念寺

同所あり浄土宗

本尊阿弥陀佛

立像長 本誓松 堂前あり古木の

德善院

法印玄以塔

當寺あり民部卿法印と称し又内梅軒宗句と号し初め織田信忠

仕へ後豊臣秀吉公の後

信行寺

同所あり浄土宗

本尊阿弥陀佛

慶長七年五月七日卒し壽六十四

妙泉寺

同所あり浄土宗

本尊阿弥陀佛

寺内小三十番神鬼子母神の社あり又佐渡國

三福寺

同所あり浄土宗

本尊阿弥陀佛

開基あり觀瀾空上人あり九品山と号し

本尊阿弥陀佛

定朝の作

夢見地藏

寺内安置立像三尺許定朝作

見性寺

同所あり浄土宗

本尊阿弥陀佛

惠心僧都作

額横額

納旗山

瀧人の筆あり記云

右書贈日本平安城東見性道場

當寺本願

村井長門守貞昌の弟主膳正重勝なり

此主膳兵織田信長公

の庶子あり村井春長軒小養をり或時直指人身見性成佛とい八字の

旗を賜

旗頭とかり

天正十年六月二日明智光秀叛逆の時信長公并小

春長軒戦死あり之小しつ

見性寺と号

同十六年六月當寺小於

七回忌の追善の時豊臣秀吉

泰詣し給ひ十七石の寺領を寄附せり

墳墓當寺

小あり其子孫原田村井の両氏檀越たり

正行寺

同所東側あり浄土宗

知恩院小属

本尊阿弥陀佛 惠心僧都作

見性寺

同所西側あり浄土宗

知恩院小属

初め

額横額

納旗山

瀧人の筆あり記云

右書贈日本平安城東見性道場

當寺本願

村井長門守貞昌の弟主膳正重勝なり

此主膳兵織田信長公

の庶子あり村井春長軒小養をり或時直指人身見性成佛とい八字の

旗を賜

旗頭とかり

天正十年六月二日明智光秀叛逆の時信長公并小

春長軒戦死あり之小しつ

見性寺と号

同十六年六月當寺小於

七回忌の追善の時豊臣秀吉

泰詣し給ひ十七石の寺領を寄附せり

墳墓當寺

小あり其子孫原田村井の両氏檀越たり

正行寺

同所東側あり浄土宗

知恩院小属

本尊阿弥陀佛 惠心僧都作

見性寺

同所西側あり浄土宗

知恩院小属

初め

額横額

納旗山

瀧人の筆あり記云

右書贈日本平安城東見性道場

當寺本願

村井長門守貞昌の弟主膳正重勝なり

此主膳兵織田信長公

の庶子あり村井春長軒小養をり或時直指人身見性成佛とい八字の

旗を賜

旗頭とかり

天正十年六月二日明智光秀叛逆の時信長公并小

春長軒戦死あり之小しつ

見性寺と号

同十六年六月當寺小於

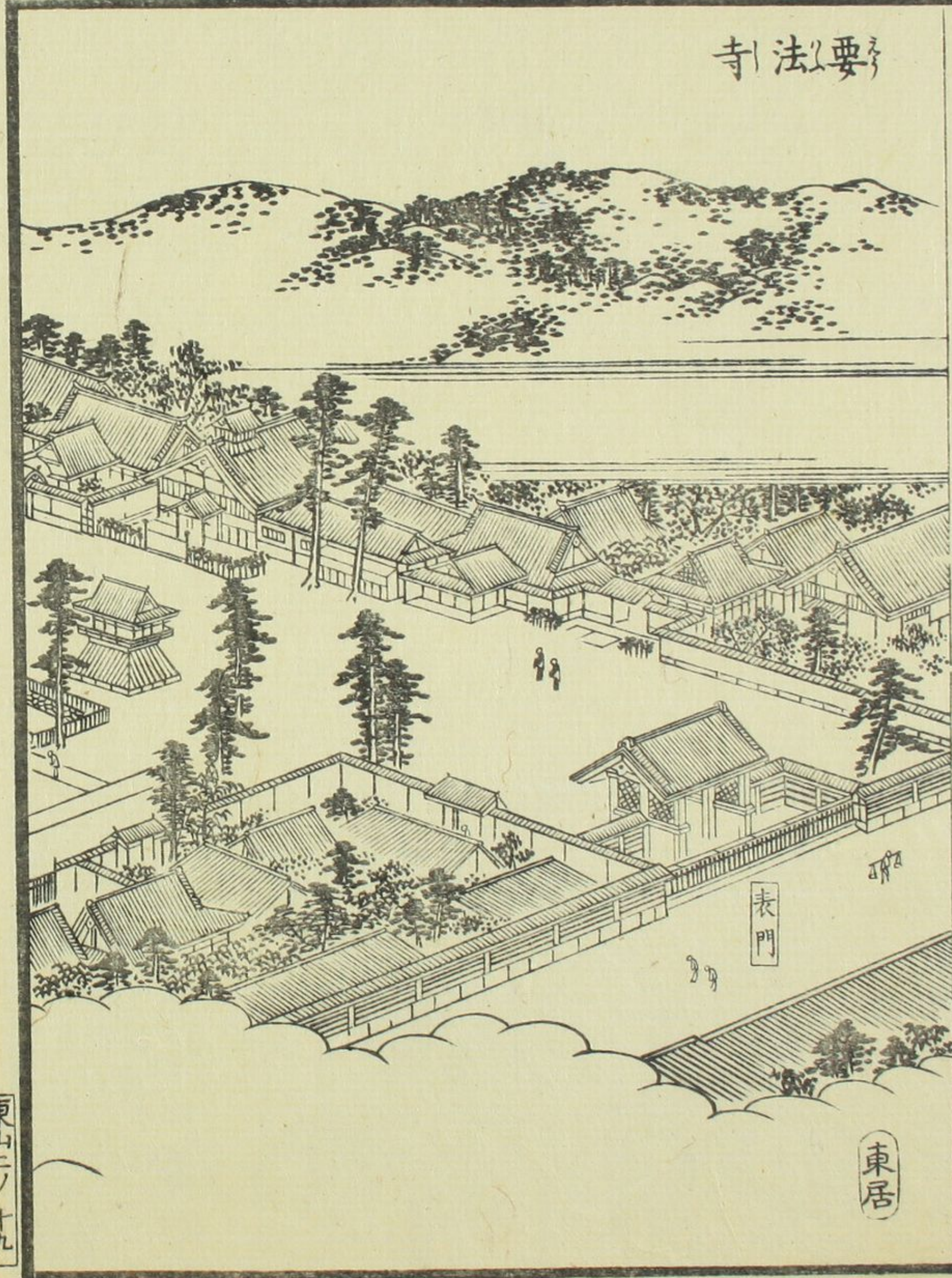
七回忌の追善の時豊臣秀吉

泰詣し給ひ十七石の寺領を寄附せり

墳墓當寺

小あり其子孫原田村井の両氏檀越たり

正行寺 同所東側あり浄土宗 知恩院小属 本尊阿弥陀佛 惠心僧都作



本山要法寺

日所あり法華宗勝為派二十一箇寺の一なり其始ハ醒井綾小路あり今要法寺町ハ其後京極二条ハ其後又遷移す

本堂 南向 中央 宮殿中ハ日身上人書寫の本尊并小蓮祖請經の像を安け 額 横額 玄宗極池本時上行杖柔惠日長照闍浮 三十二世 日長上人

新堂 本堂の西ハあり 鐘樓 本堂の東南ハあり 經藏 本堂の西南ハあり

表門 南向 裏門 西向 平常表門より 當寺開山日尊上人ハ六老弟三白蓮阿闍梨日身上人の弟子中

二位法印久成坊と号し當寺ハ花園院御宇正和四年の創建也尊師の

行徳ハ靈場記中祖見えたる如く總十六年の中小西ハ藝州石州雲州ハ

至り東ハ津輕外を濱ふ及ハ三十六箇の寺塔建立あり真假の教化授法の

人奉々討之ハ王城の地ハ此大本山と建立一正統の弟子日門上人ハ

附法あり天文法乱の後ハ泉州堺より醒井通小遷住一又天正中寺町に

遷り其後室永の火災ハ依々今の地ハ移さる誠子權實二教と正一本門

要法の宗義と弘めゆ々境なり 傳白當寺古來山寺ハ何處の傳ハ可名

多宝富士山本地上行院ハ長岡上人の口傳ナリ

聞法山頂妙寺

右同所の西ハあり法華宗十六本山の一なり 寺領二十一石開基日祝上人

本堂 南向 中央 法華首題牌 釋迦牟尼佛 多寶如來 照士 普賢

不動 四天 毘沙門天 持国天 四菩薩 上行菩薩 淨行菩薩 無邊行菩薩 安立行菩薩

樓門 堂前ニあり南向 額 聞法山 豎額 鷹司政應公筆 東持国天 張七尺許蓮慶

跌ニ天冥驗あり 拜殿 樓門の前ニあり二天の 祖師堂 樓門の東ニあり西向

常ハ諸人絶る変ナリ 大黒天堂 祖師堂の北ニあり西向中央大黒天 三十番神社 本堂の東傍ハあり相殿ハ

刹堂 本堂の西傍ニあり 鐘堂 刹堂の北ニあり 寶庫 祖師堂の 摩利支天尊と祭る

當寺の開基權大僧都日祝ハ姓ハ千葉氏下総國千葉郡の人ナリ同國中山

法華經寺の住職日薩法師の弟子中一三十七歳文明五年ハ當寺を開

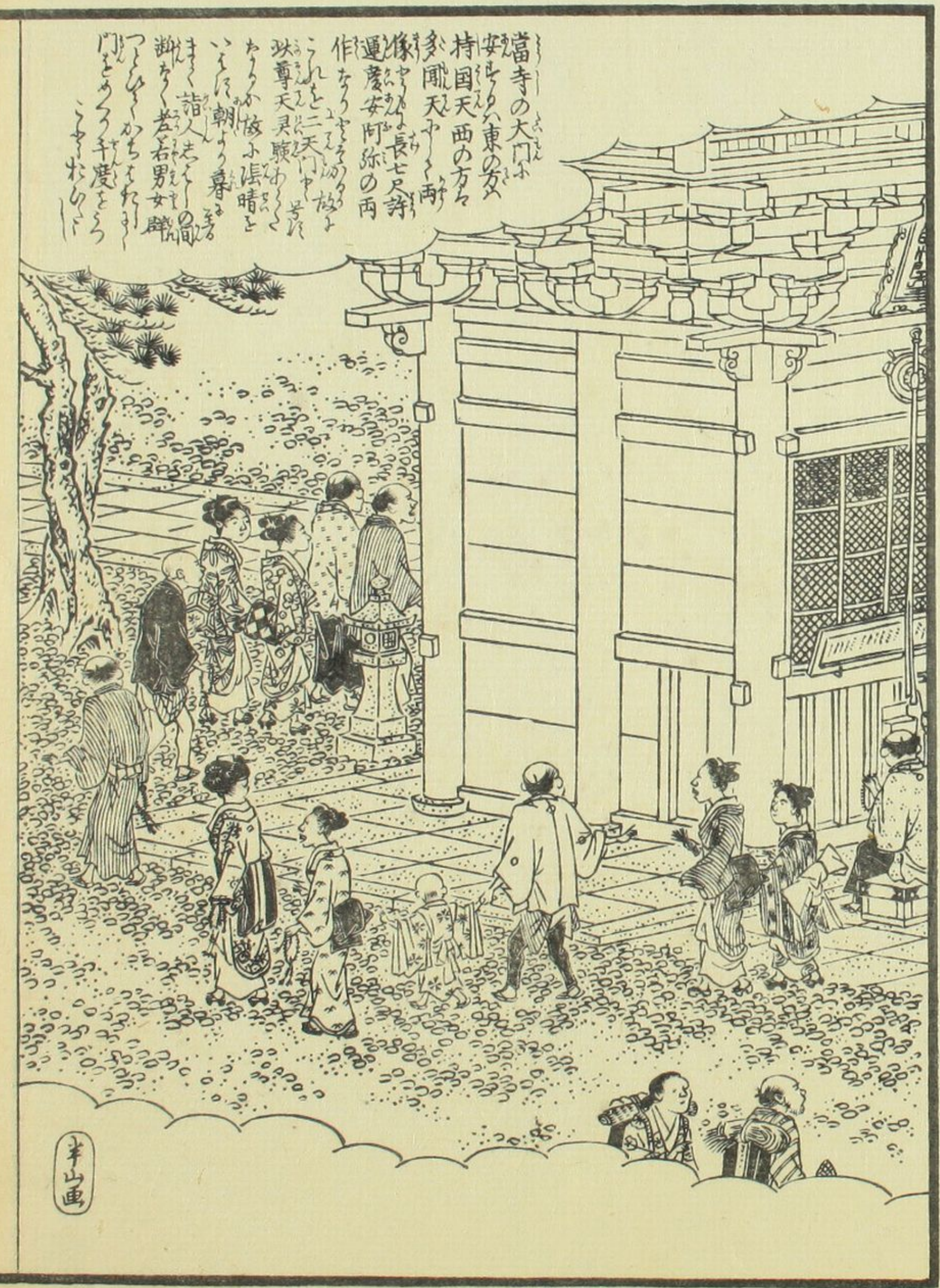
細川治部少輔源勝益寺地ハ寄附一頂妙寺と号し日祝上人永正十年

四月十二日八十七歳中一寂し辞世の歌云

八十あまり七年くけく人を渡り命かぐの橋柱ハ那

其初ハ新町通下長者町ハあり文禄年中ハ高倉通中御門の北ハ移り寛文

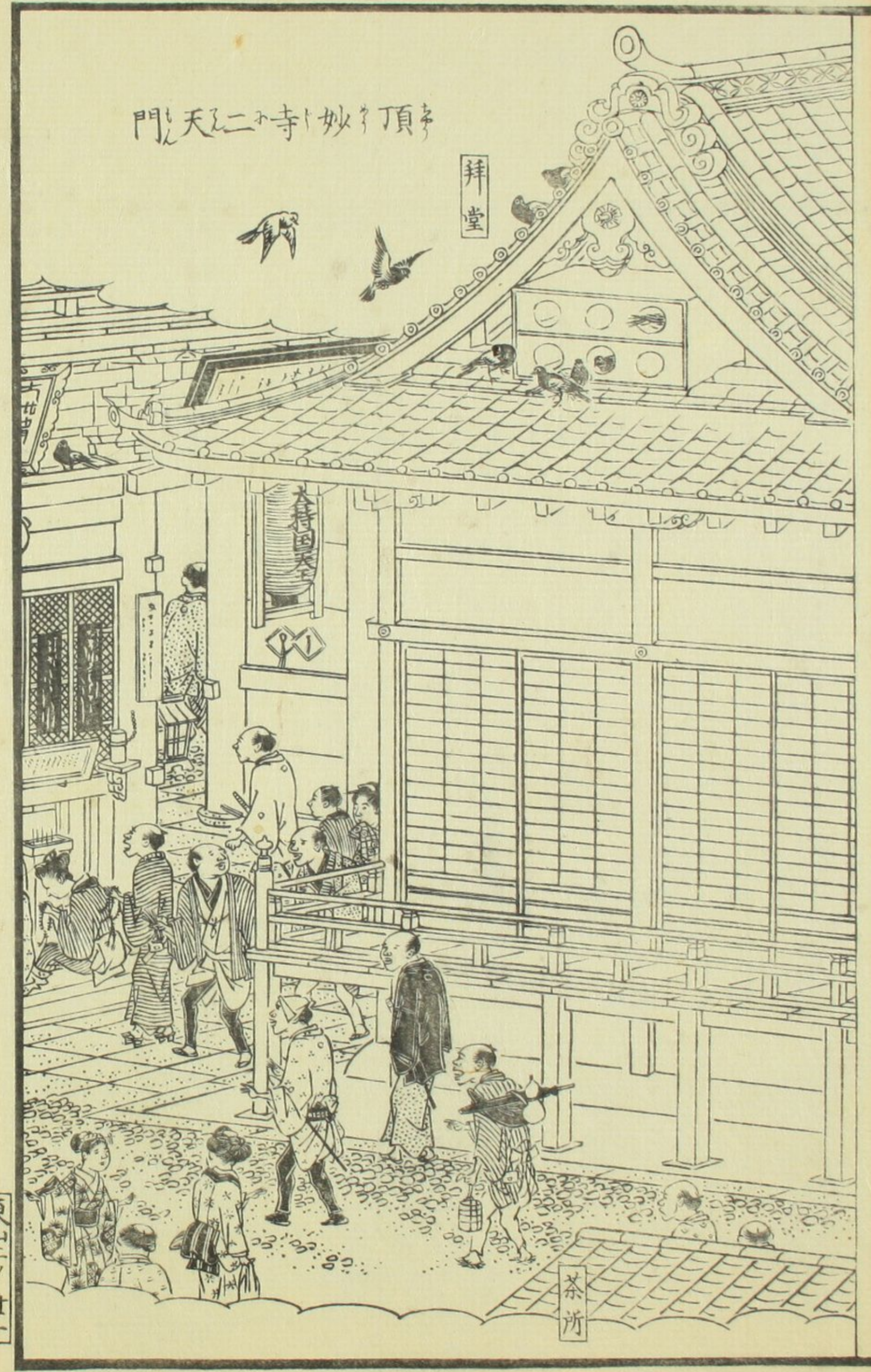
當寺の大門
 安徳の東の方
 持國天西の方
 多聞天やう
 像や長七尺許
 運慶安阿弥の兩
 作なり
 此を二天に
 秋尊天と
 かろか故小
 いに朝の
 御く若男
 門とて平度



羊山画

多頂妙寺二天門

拜堂



東山二廿一

茶所

年中又此地小轉細川勝益寺進状云明應四年十一月廿百云
天正十二年秀吉公の台命ふつ下り所の證狀當寺あり其文云

先年安土同答文又於尊念寺遂吟味方座牙四妙文
依文字お遠決之儀も改訂被仰出上り之中流法
如若くは有海玄刻寺目録に記載し作付は安土寺
忍く謹言
七月廿五日
日祝上人 玉条下
民於御法平云以 在判

法皇寺

右頂妙寺の東あり法皇寺町云當寺始り乙訓郡今里あり後大仏方廣寺の迎小轉び然る又

觀音堂

寺院の南あり南向鎮守稻荷社觀音堂の西傍あり門前野家の産神茶所同所の四

當寺往昔乙訓郡今里あり弘法大師性靈集小載る所の乙訓寺是なり
傳云推古天皇始堂を建觀音の像を安置以爾後荒廢以弘仁六年僧
空海と以乙訓寺の別當職小補せり性靈集中獻棋子表云沙門空海言
乙訓寺有數株栴檀樹依例奉獻と云寛平法皇脱履の始り行宮と云

此時再興ありと云以來法皇寺と号以爾後星霜を經く足利將軍義滿
公此を尊崇大檀越たり尤其頃真言宗たり然るも寺僧爭論の
事あり之小依兩僧と追故南禪寺大寧院の住たり伯英和尚と請
當寺の住職と以故改り禪宗となり後世大寧院小属以伯英後禪師入唐の僧
推古天皇と始り宇多天皇及び鹿苑院相國義滿公の尊牌寺小ありと云
元禄年中此地小移祖師堂宇尚存以頂年僧隆光再修と山城志小見と云

本妙寺

二玉門通東の端あり法華宗妙覺寺派祥光山と号以寺内小

熊野權現社

聖護院の社あり一の鳥居ハ九太所條東川端あり

本社

南向熊野權現

拜殿

同上

行者堂

本社の後西傍あり役行者

搆社

富士權現 本社の西小あり

同

金毘羅權現 満山護法神

本社の東あり

稻荷社

浅間權現 日拜殿南向

觀音堂

本社の東南あり西高準低觀音と云茶所西傍

鳥居

東向額 日本第一大靈 聖類 聖護院道見親王筆 同 西向額 熊野大權現 聖護院筆

當社へ往昔後白河上皇の勅願中々熊野新宮を勸請し給ふに封
境廣大中々宮殿ふい金砂を鏤め樓門廻廊枝舎經堂巍々々々在る
所相具をり寂初建立の時熊野より土砂を運ぎりや宮殿の地を
築き樹木花草ふたもまぐ熊野より移し植ふたりたり
新熊野新宮と号し然る小應仁の兵革此地戰場なるを以て悉く焦土や
かりと後世斯るも小再宮せり此森は方境廣しとてあわねと老
樹森々々々木蔭蔭鬱たり炎暑の時苦熱を辟る小願ふ

梅林茶店

西鳥居前の左右ふあり西店庭中数株の梅樹を植ふ或木下小菽をあまぐ植
秋日の萩の花事漸とつる落葉色を惜み美観言活は佳きさ程小治下の餘儀ふ
つとひく遊宴を備へる最依

二月十五日聖蹟院の梅の千々ふまき
夜ふり冷ささあつと梅をねん
月ひかり梅の千々ふまきけりつねの枝の花をねん
三子
滝原
宋閑
垣本
雪臣
さく梅の花小光をゆつたなつ月ひ梅ふかむとそか非
花と見りそふふちりそとそはあむむ梅咲ふり

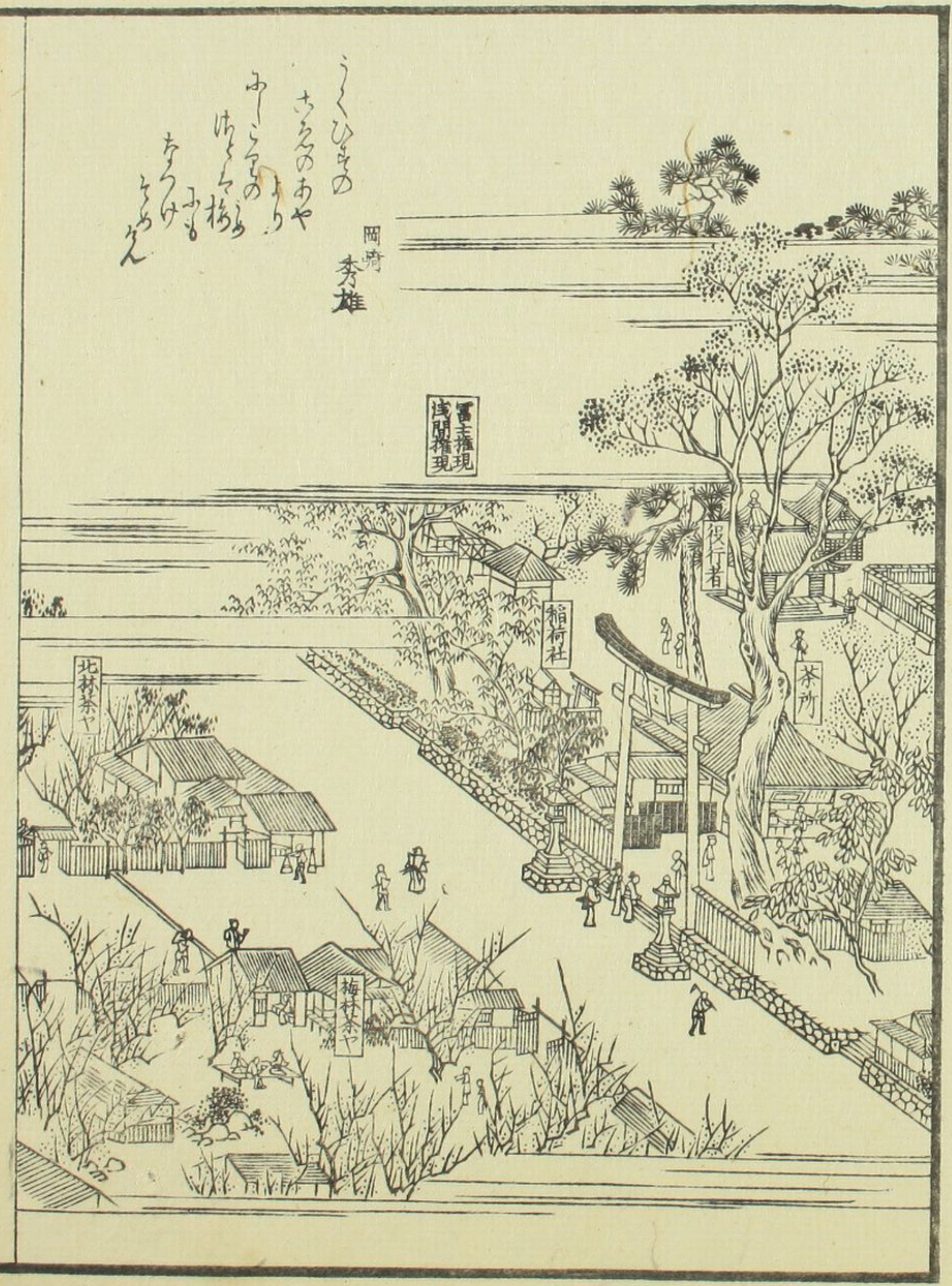
櫻塚

熊野推現の表より九一町より西九太町通の南手田圃の中ふ九一町半四面高サ四五尺ぐりの
塚なり一説小宇治惠左府頼長公の社あり一説左府墳なり
按じり小左大臣頼長公の靈と粟田の宮小崇徳院の御靈と共小祭りたり諸神記に見えり
然る小又ふも社のありや粟田宮の同靈といふ遠くは尚考ふべし

宇治左大臣頼長公と申し知足院禪閣殿下忠實公の三男や入道殿の公達の
御中小殊更愛子や御座り人品も左右ふ及む上和漢も小人小勝と
禮義を調へ自他の記録小暗くは文才世ふ知られ諸道小浅深を捜り朝家の
重臣拱祿の器量たり然し御兄の法性寺殿の詩歌小巧や御手跡の美御座
り賢臣必し是を好むべし我身もこの全經を學び信西を師と鎮し
學窓小籠り仁義禮智信を正し賞罰動功を別し政務を切とやふり
上下の善惡を糾さぬ時の人悪左府と申なる保元
白河北殿 續世継物語小白河大炊御門殿より熊野推現の表の南より
西小至る地たる北九太町通南竹屋町通ふあつと人年
保元物語云新院 崇徳 保元元年 田中殿 鳥羽 白河の前齋院の御所へ
御幸なる云又云新院の齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ云白河殿より

白河北殿

保元物語云新院 崇徳 保元元年 田中殿 鳥羽 白河の前齋院の御所へ
御幸なる云又云新院の齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ云白河殿より



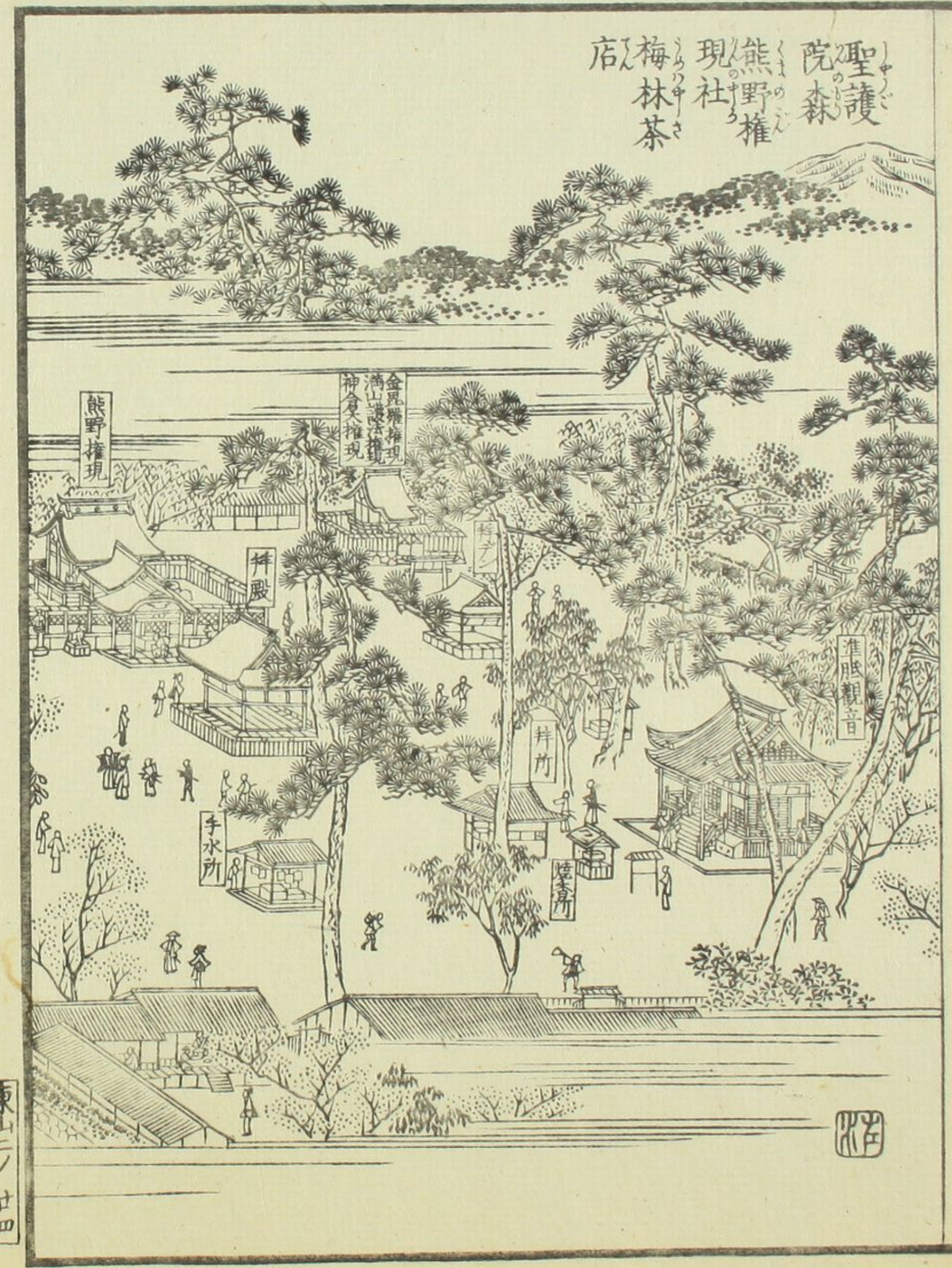
うくひまの
 ちまのあや
 中
 梅林茶
 ちんげ
 秀雄

熊野権現
 浅間権現

梅林社

北村茶

梅林茶



聖護院
 熊野権現
 梅林茶
 店

熊野権現

金剛権現
 神倉権現

拜殿

准胝観音

拜門

手水所

東山ニ廿四



北河原より東春日の末有る北殿を申す南の大炊御門面東西小門二あり東の門を平馬助忠正兼つて父子五人并多田藏人大夫頼憲都合二百餘騎許り固たり西の門を六條判官爲義兼つて父子六人堅めたり其勢百騎許り過ぎり是を猛勢なるべき嫡子義朝小就く多分ち内裏へ参り鎮西八郎爲朝西河原表の門を堅め北の春日表の門を左衛門大夫家弘兼つて子共具く固たり其勢百五十騎と聞へ云々按て小右少春日浴中の通なり未其東の河原鴨河原を大炊の御門に今竹屋町通なり然竹屋町通の北側小南向小東西二箇所の門あり西河原小南門あり北九太町通の南側小北向小門あり左衛門大夫家弘其子中官侍長光弘馬小兼つて春日表の小門より馳参り敗軍のしを告る事保元物語小見えたり北殿九太町側の南側小門より出御あり北河原をさへ落させし事敗新院より左府頼長落させし時東の門より出御あり北河原をさへ落させし事

白河新御所 右北殿の東あり百練抄小長兼三年十二月廿八日上皇より白河北殿の東の白河新御所を渡御たまはる云々頭頼朝これを造進せし事

白河南殿 北殿小對せ殿あり

白河院 白河院より北殿の南あり云々然竹屋町通寺の地云々法勝寺山州名跡志云々大將軍の杜の北三町あり東白河の西の畔小なり西に分はる一説小法勝寺は大地より下岡崎村あり黒谷道のなり小五大堂あり尚西の方小廣よりなり聖護院の木の南より法勝寺あり有る云々白河の前齋院の御所さたるなり云々白河殿小廟御所を以て其なり云々

寶莊嚴院古趾

右白河北殿の傍に當寺あり東寺の兼帶所なり云々

今古圖を考ふ小宝莊嚴院の敷地の南へ冷泉通川也北へ春日通九太町通其間小大なる通條今竹屋町あり是所謂大炊御門なり其南の地小宝莊嚴院北の方同阿弥陀堂の敷地と有別竹屋町通九太町通あり聖護院の木の西あり是則栗田宮崇徳院の御影堂寺の地也按て小大炊通より春日通及へ阿弥陀堂の敷地あり百練抄云平治元年三月廿二日白河平體の阿弥陀堂供養大炊御門の北讚岐院の御所保元の戰場灰燼ありの跡也云々是正前云白河寶莊嚴院大炊通の南側あり見え續世継物語云々鳥羽白河の大炊殿白河北の向小御堂寶莊嚴院造らせ給ひ供養せさせ給ふ云々保元物語云々爲朝宝莊嚴院の西裏小返合せ火いつ程を戦ひ云々又云下野守朝の堯の星を射削り餘る矢が密莊嚴院の門のり立小篋中せめり立たり云々按て小爲朝白河の北殿の勢より安藝守平清盛が軍兵小恐れ寄る事能はる春日表の北の門へむすれ次下野守義朝小對り下知を鎌田正清百騎より押寄散々小敗り河原の西の

帝王編年記白河の中御門 今の榎木町 未の北河原の東小神殿を造り
崇め奉らる崇徳院と号し保元戰場是也と云 則此地の事なりむ前小
白河の北殿の舊趾あり有るべし 此辺所白河の殿舎有る成

家集の 子の日せし忘れぬ 松山の神や 孝

聖護院宮

熊野推現の迹の北東あり 法親王なり 往昔開基六智證大師中
法親王なり 又此地なり 聖護院村と号し
頃より法親王任職し 則ち三井の長吏又熊野三山の別當なり 是故なり
當門主修験道を兼り 山伏を官領し 給ふ當院初に 常光院と号し寛治
年中三井寺の聖護院増や 僧正此所に 任職し 給ふより聖護院と号し
此僧權大納言經輔卿の息なり 熊野三山の別當職の始也凡山伏天台
真言の二流あり天台に 當聖護院御門主に 属し 此れを本山とし 真言なり
醍醐三寶院に 属し 此れを當山とし 熊野三山の檢校に 天治年中に 僧正行尊と
其始なり 牛車に 許し 三山の檢校なり 修験道の事と預ると云々

中嶋棕隱宅

聖護院村西南若松町あり

翁名に 規字に 景寬通称 文吉毛 棕庭前に 繁茂に 故小棕隱と号せり
其先訥所翁に 伊藤仁齋の門なり 名譽なり 以来世々儒を 業に
平安の名家なり 翁詩名の海内に 顯然なり 實に 秀技の奇才あり
新意人勝を 拉り 殊小鴨東四時雜詠の如き 好士を 感哭せし 江湖の
頑儒輩に 惡き 好み 今に 落を 主と 且和歌を 伴高 蹊小 學ん 又
逸品なり 晩年に 此地を 備へ 園を 造り 亭舎を 構へ 詩歌の 餘具 狂詩
文を 著し 曾く 一酒樓を 營み 戲を 小銅駝餘霞樓の偏を 掲げ 此れ小
客を 延く 對酌劇飲 園中牡丹の名品數株を 栽り 花時に 雅志を
放觀せし 牡丹の詩若干首あり 今爰に 抄録し 翁晩年
小に 薙髮し 益意を 任せし 詩歌を 吟詠し 時に 安政二年六月
廿八日歿 年七十七

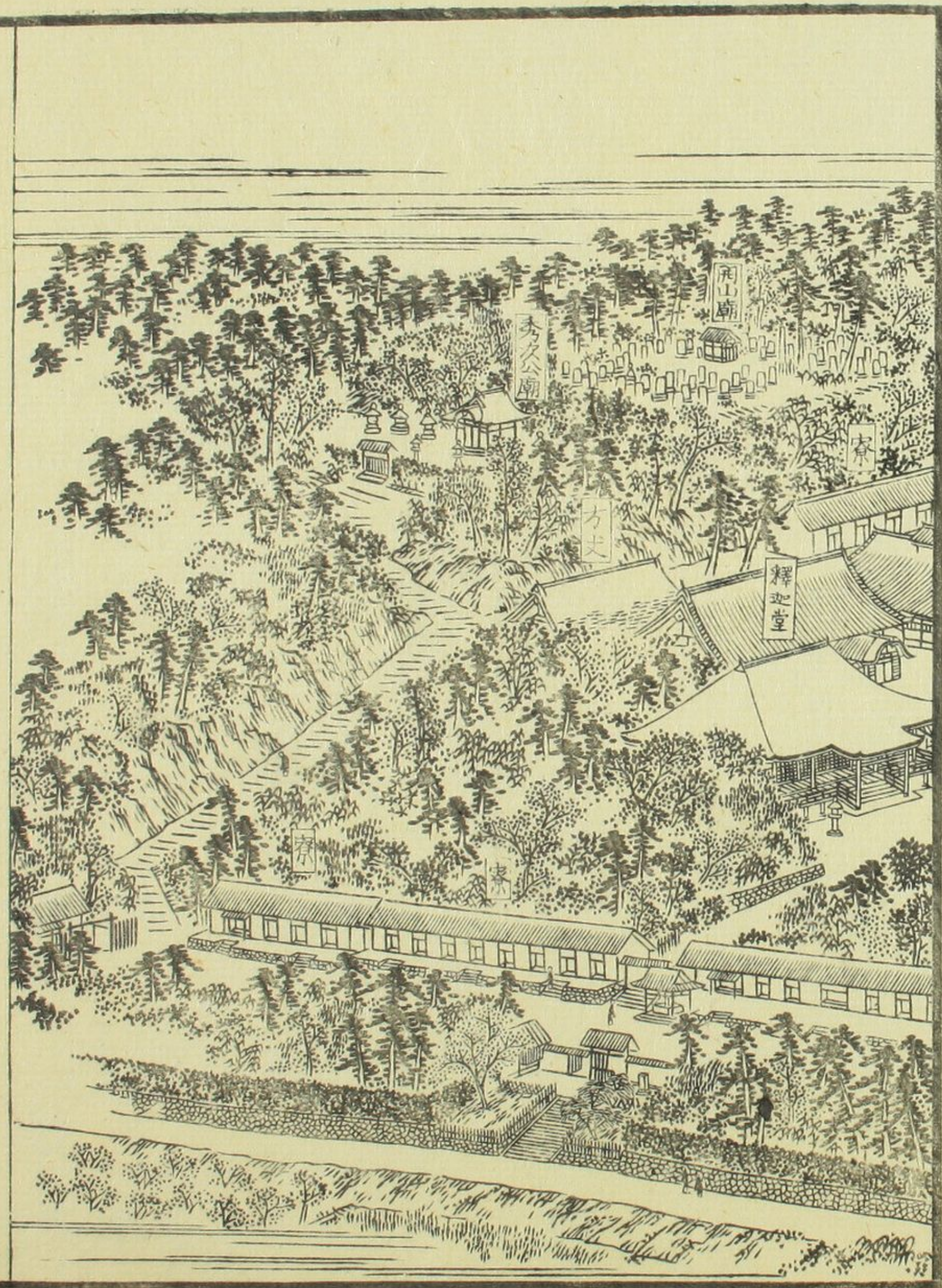
壬辰三月錦織草廬落成賦之自祝十首 今録一

御體於水尾山上

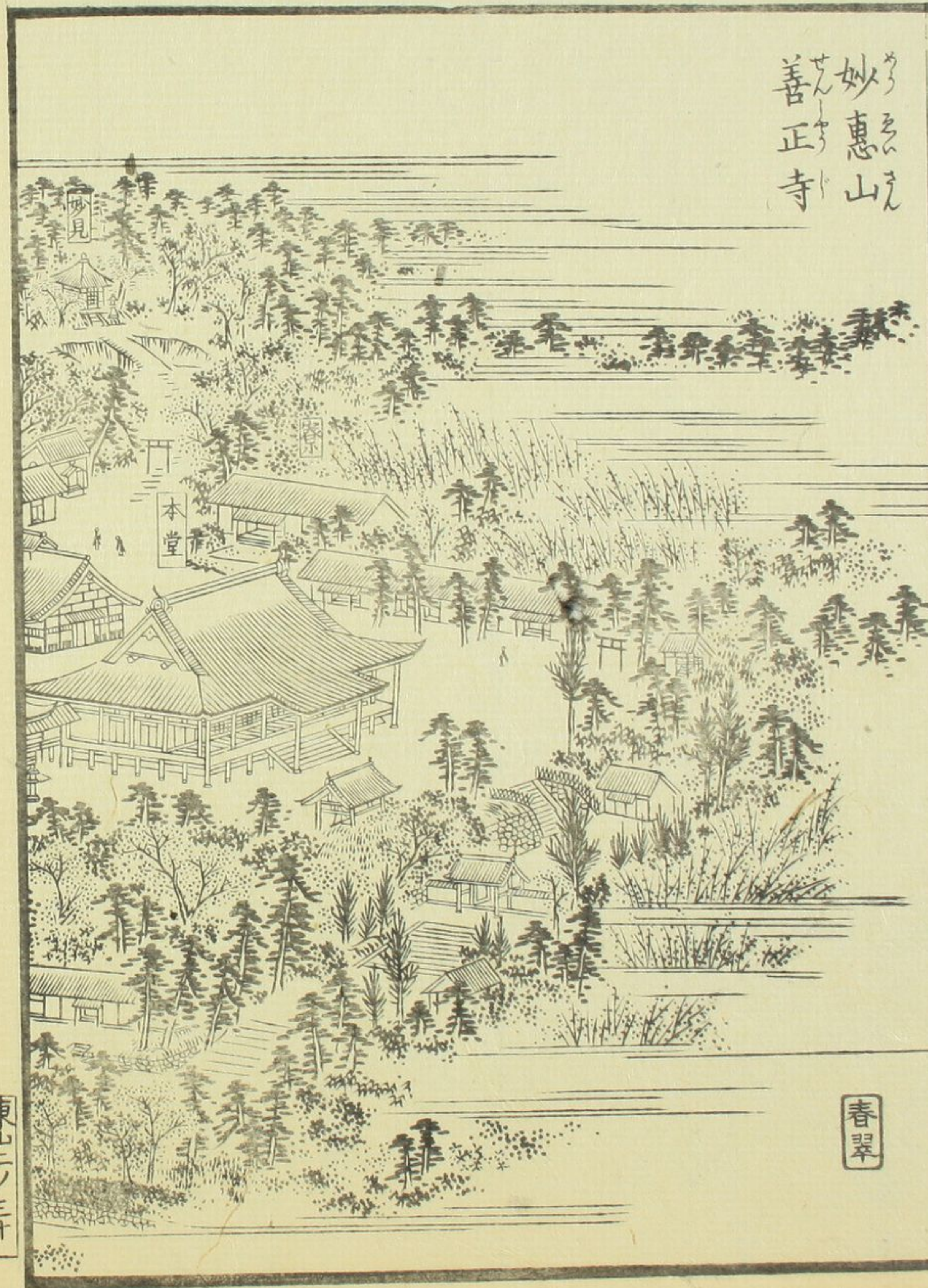
保元物語云源為義宿所圓覺寺の館たもと火と掛焼拂かきさらひぬ云々
 同京師云為義の山莊北白河圓覺寺云々又云為義入道義朝仰く七條
 朱雀あしや誅せし首實檢しんの後義朝給く孝養まへま由仰下され
 々々圓覺寺小収め墓と建壇たんでんと築き卒都婆そとを以造立さうたてせしぬ云々
 平家物語云故左馬頭義朝の首平治の後獄舎の前ちかる昔むかしの下した埋うめ
 後世のち吊つへ無アくと時の大理だいりふけ申請しんしん東山圓覺寺との所ところ深ふかく
 収と置おたり云又異本義經記云安元二年正月三日義朝政家十七回の
 當あたり其方そのかた様の人々圓覺寺やの形かたちの如ごとく佛事ぶつじ作善さくぜんと管くだたり云
 新羅森 聖護院築地の東ひがしつふあり申まを新羅明神しんらけいじんの祠ほこを建たつれ三井寺さんせいじの
 御所ごしょ稻荷いなごり社しゃ 聖護院せいごえんの東ひがし街まち邊への北きた傍かたにありぬ一いっ條じょう殿でん簀すい丹にありぬと以てして
 飯成社いなり 右みぎ同どう所ところ聖護院せいごえん表うらの異ちがひ方田圃でんぼの中なかにありぬ世よにお辰たつ流ながりぬ御所ごしょ稻荷いなごりの川がわ上うへにありぬと
 尚なほ天あま豊とよ春はる稻荷いなごりの社しゃ等らにありぬ聖天堂てんたうあり

飯成社 俗よふ辰稻荷たついなごり





妙惠山
善正寺



東山二ノ三十

春翠

善正寺

右同所の東北あり法華宗一統流本國寺小属り妙惠山と号し豊臣秀次公の母公瑞龍院の建立あり堂の後小秀次公おとし脚一類の墓あり

本堂 南向 法華首顯牌 釋迦佛 釋迦堂 本堂の西あり南向本尊釈迦佛 金剛九寸の座像元和元年二月三日

肥前国玉名郡中村の民人靈夢と感 漁人の網ふりて 後郡吏富田重吉汝像と傳く 瑞龍院秀次公尼寺聖に秀次公居感喜勝に其法嚴と新たり 當寺の安置 一

二十番神社 堂前東傍あり日箱荷の 鐘樓 堂前西 學子寮 本堂の東傍表門内の 東側等小列

當山開基の求法院第三世本妙院日鏡上人や 本願の豊臣閑白秀次公の 母儀瑞龍院殿日秀法尼 法園秀法公の妹中 也秀次 始り三好康重の養子 秀吉公の 義子と成り閑白の職と嗣とす 秀次公四海小肩を双ぶる人なく遂小

其威小誇り給ひ秀吉公の命小付き文祿四年七月十五日小高野山小於く 誅小伏し 秀次公の母儀秀次公の追福の爲小建立し給ふ秀次公の法

名と善正院殿高岸道意大居士と号し故小善正寺と名付たり日鏡上人 山を開き樹木を植へ全く一大場と成り 元和二年二月 又學校の四世小いたり頭壽

院日演上人の真起たり夫より詮量院日休師小學徒と讓り 万治元年閏十月 十七日逝り

りよまる程小諸國より僧徒のつり講演の座小文庫となく式日の義論

誠小切が如く瑳が如く春の都下の貴賤花小詣り來る老若男女の歩も多し 毎年數日法談あり京童の諺や櫻談義をいひたり當山の並木も多し 爛熳の堂上堂下小幕次張り謡と舞の道と酒宴遊興小三界の苦と憂

沙婆即寂光の妙土と観んば忍ち爰小釋迦佛と拜し金銅像の座佛 少く海中現出の靈佛たり殊小万品無量の宿願奇や 感應を得る 事小普く世人の知る所や 實小海内無雙の尊像たり 每歲三月九月廿日 廿三日迄開扉あり

善正寺前殿下高嚴道意塔 同堂の後小あり 豊臣閑白秀次公をり生年三十歳 健性院三位法印日海塔 右日所あり秀次公の父公たり

瑞龍寺日秀尼塔 右同所あり豊臣秀吉公の妹 秀次公の母公たり

致祥院榮岳利生塔 右同所あり秀次公の室や 政所と称し菊亭石大臣晴季卿の 若君一方出産あり共小文祿四年七月誅小伏したる

妙泉道喜妙授各靈塔 各日所あり秀次公の 知息たり共小誅伏し 此余秀次公弟丹波守少將

秀勝同季弟又大和納言秀長卿の母公の塔あり畧之

景光院前右府月叟常空塔 同寺あり今出川宣季卿の 本國寺 日相僧正の父公たり

近衛坂

善正寺門前の北の坂と云ふ是則ち洛中近衛通を通り出た水通と云ふ條あり又俗小

按じり此邊小靈鷲院と云ふ寺院ありや靈鷲院を近衛坂と云ふ

三井寺院家也山城名勝志小見えたり藤氏系圖寺房瑜号靈鷲院法印大僧都

應仁記云三井の御門徒小圓満院聖護院花頂實相号富天山近衛坂

香川景樹宅

善正寺の南路の東側あり

景樹翁の因幡國鳥取藩中某氏の次子なり京師小出徳大寺家の臣

香川景柄の嗣子とも若き時より詩を好み天稟の妙あり然るも故有

跡と侘人小嗣も別一家を成り然も香川を以て稱し今徳大寺家

の侍臣とあり長門介小任に終り近年獨歩の名人と稱せり小至る嘗

古今集を正し解得んを深く志し夙夜研究し竟古今

集正義と著り其説たり契沖師の餘材抄縣居翁の打聞鈴屋翁の遠

鏡其他古註と普く涉獵諸説の誤を辨駁一己の見識を立大新説と

出人名感伏後富岡崎小住又鴨河の西涯小別居頻小奇書と講

其徒小教示以時小門小幅濶教とけ添削と請ふの士子と以て數々海

内翁の門人のあが國とてたり天保年間琉球人來聘せり小其

正使浦添王子歌を能く能く彼國人翁の風を欣慕し門小入詠歌の添削と

請ふ是其美を異邦小及りの大盛事や又國華をばや翁山陽頼氏

中友善常小和漢詩歌の義と論り天保十三年從五位下肥後守

小叙任り同十四年三月晦日卒り年七十四門人嘆惜禮を厚く洛東開

名寺小葬る後名を實參院悟阿在焉居士と号し著述の書古今集正義

百首異見土佐日記創見中空記六十四番奇結薄氷桂園一枝新學異見

万葉集据解活言考等たり其他家小遺稿ありり委六世の家傳是

土肥二三同村小あり茶人系傳云土肥二三名ハ豊隆と云動て牧野備後侯小仕茶を織田貞置小學ふ云々

二三俗稱土肥孫兵衛と三州吉田府牧野侯小仕祿二百石を食じ二子

成失ひ忽ち隱心を生し仕と辭し薙髮後岡崎小住自在軒と云

火宅とも云ふ火宅小やめい直小自在の権子たりり

是は依り軒号より絶つ膝と客らどりの宅を茶の織田の風を學びま
 香を好む平家を語く琵琶の志も上手なやうと常ふれど計の美
 服を着たり不或時古下駄と縄おつぎぎ持つらやと向小借人返
 かりとひひとかり物事お意ととめば往來は所定あり懐小金二枚をた
 くまへ其包紙小何所やも倒せれ所や體をかへ給はれ是は其貴
 充るなりと書付伯倫の鋤を荷をせたりもかかき所為なりされ健
 なる人少く齡九十近づく足駄をまき黒谷の茶店へ物喰小行と日三
 たび三十丈一日を過けお足ると言れとらん始め火け壺とつらのお米を畜
 へぬりよ一夫も物づく成々一杜鵑と銘ある琵琶一面平家二巻を参州の
 士山田氏小あへ今尚其家小蔵せりとらん又二三と名をよとて一羅髮
 せし時人早く聞つけ書面を送り法師の名は何とか向ふ否未と名
 ちう二三と書りといふ頓く二三と書たれば是と名たるとて夫
 小極うとぞ享保十七年正月六日及び年九十四
 季一八近世時人傳小
 見えり

此辺岡崎聖護院等の
 村民ハ茶藨を作ら
 精々毎年仲春より丸
 茄子の初りを出し
 近來尾張種の大蘿蔔
 つら得例歳十月のち
 日毎小市小荷を賣
 ちしちり村人これを
 沐し風呂の味をけ
 成ハ油豆腐共煮
 羹や今或十夜講の
 料理用之賣例成
 たり都下一箇の
 奇現やあり

我畑の
 草丸
 大根引



紫雲山金戒光明寺

黒谷あり浄土宗鎮西派四箇の一本寺なり塔頭三十一坊

本堂 南向 圓光大師 隆徳二年五月許 寺記云此像當初藝洲瀬戸田安住

東照官尊命小依り當山小移り所なり其故は是より以前此堂小上人自

作の像を安住然る小此堂失火の爲小同縁の時小僧あり此像を抱き

出ん 共小焼死に此旨台聽小達一是と惜之彼と憐之諸國中自作

の像を尋ねて遂小得給ふ所なり 同西服檀 親鸞聖人像 座像二尺五寸

阿弥陀堂 本堂の前東傍あり 中央阿弥陀佛 座像六尺許惠心僧都作惠心生涯

經藏 堂前あり四方正面あり室の釈迦佛阿弥陀佛 善導大師像 座像四尺許新作

觀音堂 經藏の東あり 本尊千手觀音 立像七尺行基作 吉備大臣像 座像二尺五寸

當觀音堂へ往古僧正行基の開基なり 額主右大臣吉備公なり 善正寺の傍也有

尚吉田寺の額を掲ぐ柳以尊像ハ元正天皇養老元年同右大臣吉備公唐土より彼地小

作れり則ち此本尊なり 帝の歡聞小達一奇異の事なり 堂と管と庭園を奇

たすへり委々緑起小見えり

鐘懸松

堂前あり傳云熊谷直実遁世して著せり甲と

鐘池

方丈の北庭あり

昭堂

本堂の東あり南向清正院とて神君の姫君

極樂橋

觀音堂の東の下檀

熊谷堂

池の南あり東向 本尊阿弥陀佛 座像長

股檀母衣結御影

法然上人

鏡

法然上人蓮生法師の師弟の形見なり 鏡の御影なり

同檀

熊谷蓮生法師自作

十六歳の御影數盛の法名と空願琳莊大居士と号し画像ハ元祖大師の画きりり

傳云此地ハ蓮生坊居住の所なり

極樂小別の者とや沙汰まらん西中向に後見せぬを

約束の念仏をまらん

勢至堂

熊谷堂の上の方あり法然上人の廟堂なり 本尊勢至菩薩座像凡二尺五寸許

無官大夫數盛塔

勢至堂の上の方あり數盛ハ平經盛の子なり 元暦元年二月七日撰別

熊谷治郎直實塔

日野の傍あり熊谷上人の數小飯入り出来 法力房蓮生法師

鎮守稻荷社

右日野石階の下あり

三層塔

同所石階の上西向 本尊文殊菩薩 長二尺五寸許座下獅々凡三尺許日本三丈

殊の其一なり三文殊ハ附後の切戸大和の

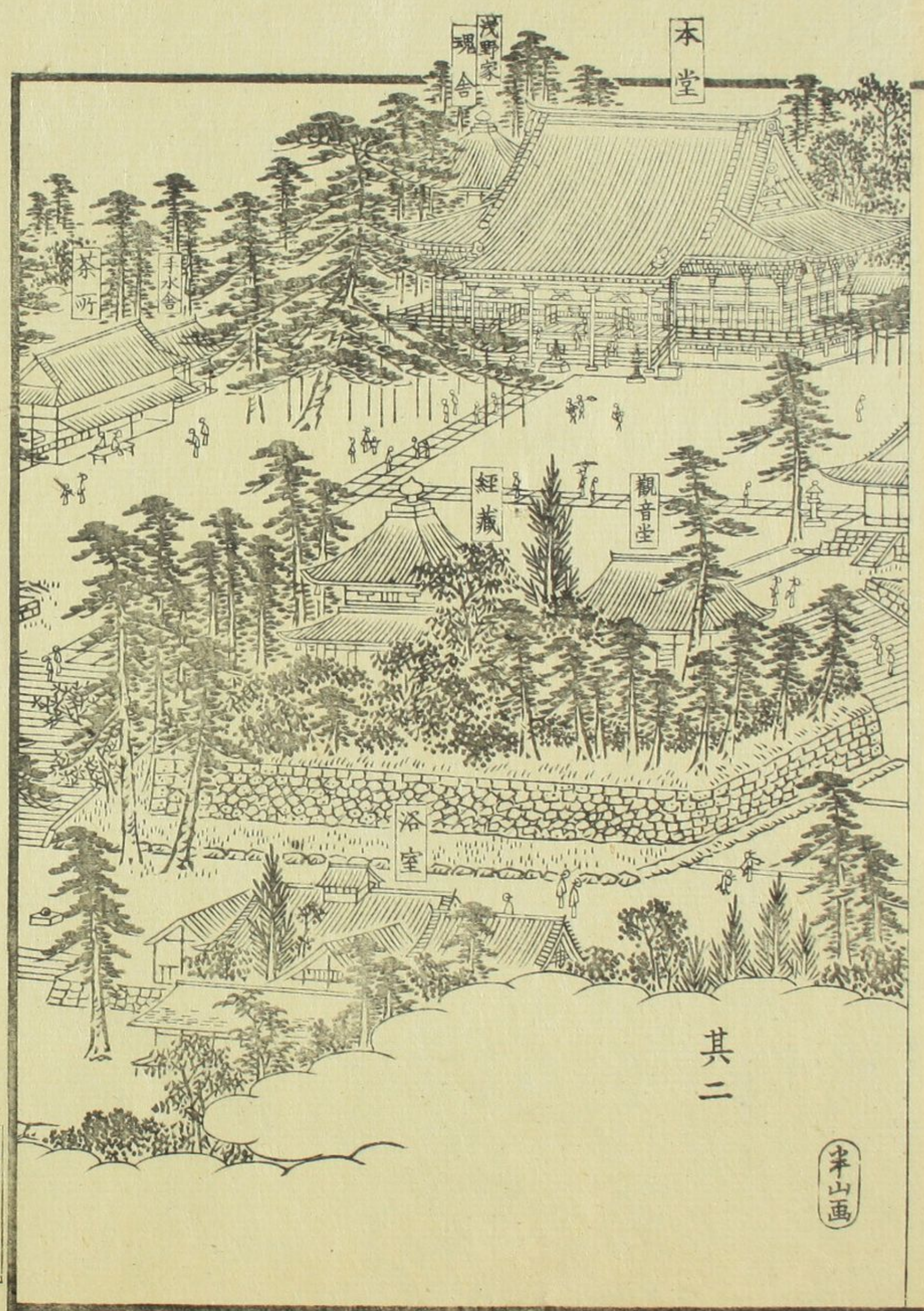
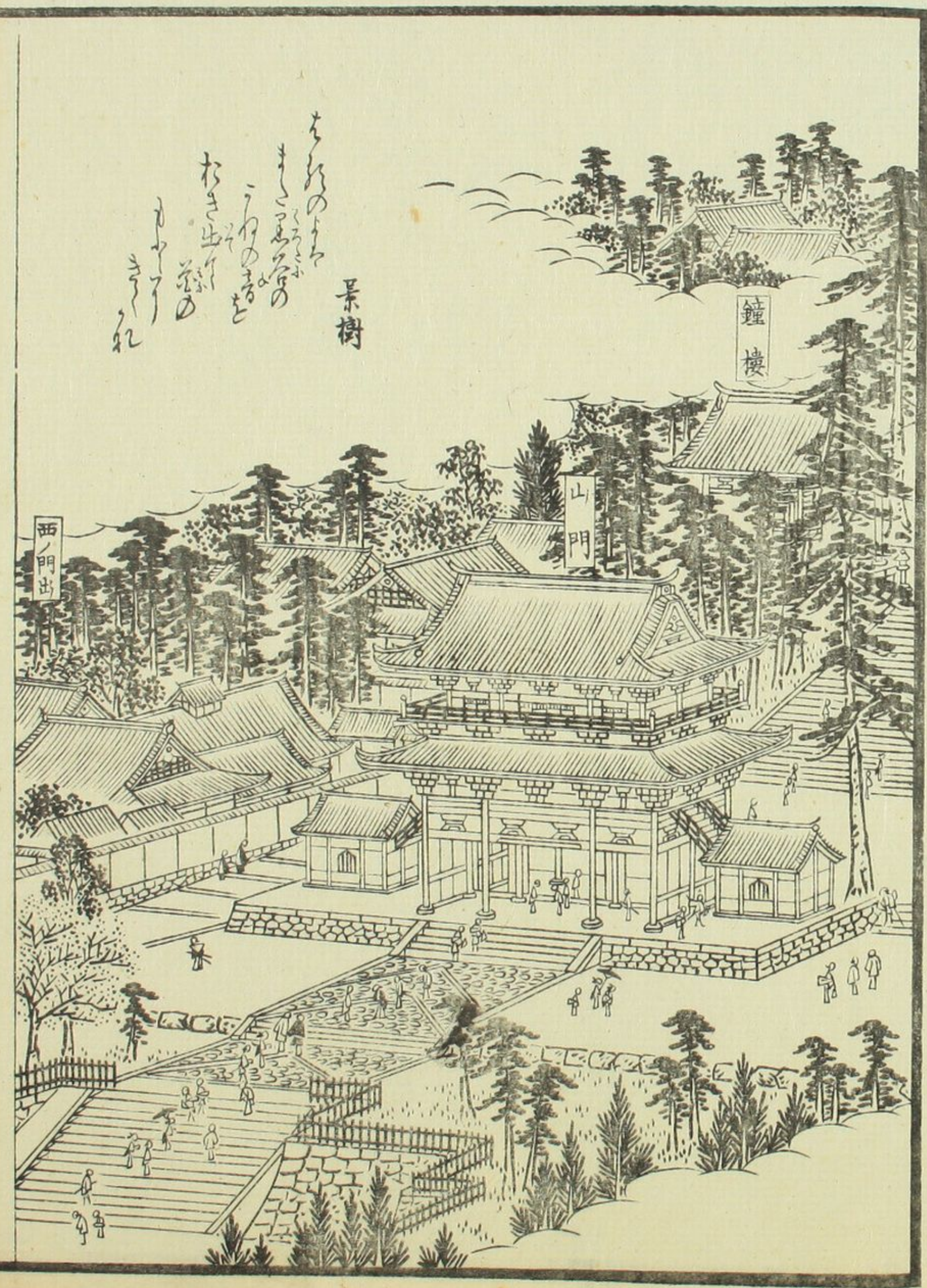


東山二ノ三十五

くろがや
黒谷の
中坊の
まじり
茶

蕪村

（東山画）



安倍以本尊寺（今小秀速）其若め岡崎村密藏寺の棟尊寺なり
明星水 塔頭（義詳）浴室 山門（東傍）山門（南向）本堂（正面）石壇（下小）
柳當山（元祖）圓光大師閑棲の地なり其初め上人獻山の西塔黒谷小住
多し後（小）移住（小）故小此地と新黒谷号（原の名栗原）往昔此山の
石上より紫雲たるを以て紫雲山と号し撰取常護誓約小准し金戒光明寺
と名せり 當山什物の中の第一上人自筆の一枚起請文（元祖大師鴨大神宮の神勅）
書し有毎歳六月廿五日出拂の日はと出（諸人小拜せしむ）
西雲院 支殊塔の北あり此院（小）常念仏を修（先年）既小一（万）日不退轉念佛の結
此院開基心誓宗嚴（始り）朝鮮國某州の令り豊臣秀吉公朝鮮征伐小
よび小野某のため小虜小せし日本小来り天性男根なり故小到り所闡令り
峰頂賀達庵小仕へ又高臺寺政所の亭小事小尔後知恩院満誓上人小從り
薙髮（僧）なり時小公方家の侍女一佐阿茶局資料を施し院と此所小
創り依り唐土朝鮮の投化人本朝小於り死する時斯院小葬るとり

紫雲石 堂前（小）前小云元祖大師一宗開発の時以石上より紫雲をり（異香）
崇源院殿塔 當山（小）あり台徳院相公の（此）余貴族の塔許多あり略之
石川主馬佑吉信碑 洞墓地（小）あり東照官の男松平薩摩守忠吉朝臣豊去の日
澤村大學助碑 同所（小）あり細川越中守忠興入道三齋小仕へ同越中守忠利日肥後守
天野半介正清碑 同所（小）あり原三河国の人なり慶長年中撰州難波の合戦小
山本権兵衛尉源義安碑 同所（小）あり慶長年中撰州難波の合戦小松倉豊後守
と重政と挑（小）義安一番第と合せ道徳と厚る世
山崎間齋碑 同所（小）あり間齋名嘉字一放義一（小）垂加と号し俗稱嘉右衛門播州の人
王鍵南碑 同所（小）あり唐土投化の人なり京師あり因と業（小）詩文と作る
中山 黒谷洗明寺の西の門外と今（小）の真如堂の地なり黒谷山の惣名なり謂（小）東小
淨光菴趾 黒谷北門の外西傍（小）あり淨光系（小）能優中（小）希代の志（小）殊勝（小）母（小）淨光（小）氏と中山と
号し（小）草庵と（小）道徳（小）常（小）行（小）念（小）仏（小）と（小）淨光（小）と
又此地名と中山と（小）一寺と
所謂の名証自性なりとの歟

鈴聲山真正極樂寺真如堂

黒谷光明寺の北に隣り宗旨天台光官御支配

本堂 西向 中央阿彌陀佛

立像三尺三寸 慈覺大師作 脇士 左 千手觀音 立像一尺 右 不動明王

座像一尺許 元三大師堂

本堂の北にあり西向慈惠大師座像一尺四寸許 經藏 本堂の後小

阿彌陀堂

本堂の南にあり西向三尊像とあり 鎌倉地藏 同前隣り古仏五尺許

銅阿彌陀佛

阿彌陀堂の傍にあり座像八尺木食正禪造立享保四己亥八月十五日

三重塔

堂前南傍にあり四方正面 縣井觀音堂 塔の後より東向如意輪觀音尊像

千躰地藏堂

塔の北にあり南高地蔵の 鐘樓 塔の東にあり 鎮守稻荷社 元三堂の西にあり

茶室

千躰地藏の西に列に南向 藥師堂 北側あり本尊石仏座像一尺五寸許

傳云此本尊石藥師如來其坐位禁中安置し數奇瑞ありなり正觀早院の

御宇今出川内府勅さうけ當院の住僧法印全海命本院の本尊をさうけり

中ふあり今尚石藥師通し 表門 西向黒谷光明寺北門通

當寺開祖戒算上人願主白河女院たり抑本尊阿彌陀佛八天長年中

江州志賀郡苗鹿明神より神木たる栢木と慈覺大師お給ふ大師をれと

得く住坊お移しし此木の伐目より毎夜光明を放つ大師あや

打割く見し小片少座像の佛躰一片少立像の佛形鮮小在く恰も

画々か如然も小此座像蓮花部の印相の阿彌陀佛と造亭も

今一片立像の形ありと亦刻彫なりり其後屢靈夢を得りりや

入唐求法の願ありが遂小仁明天皇の御宇義和五年六月廿二日遣唐使

参議右大辨兼相模守藤原常嗣同船渡唐天台山五臺おたり

諸明師小見え頭密の法を傳授殊更北臺の普通院お於生身の文殊奎

小對顔親王淨刹ハ功德池の浪の音小准調へ作れ引聲の阿彌陀經と

傳授せり其後彼國會昌の兵乱起る是故小無數の勞煩と經本朝義和

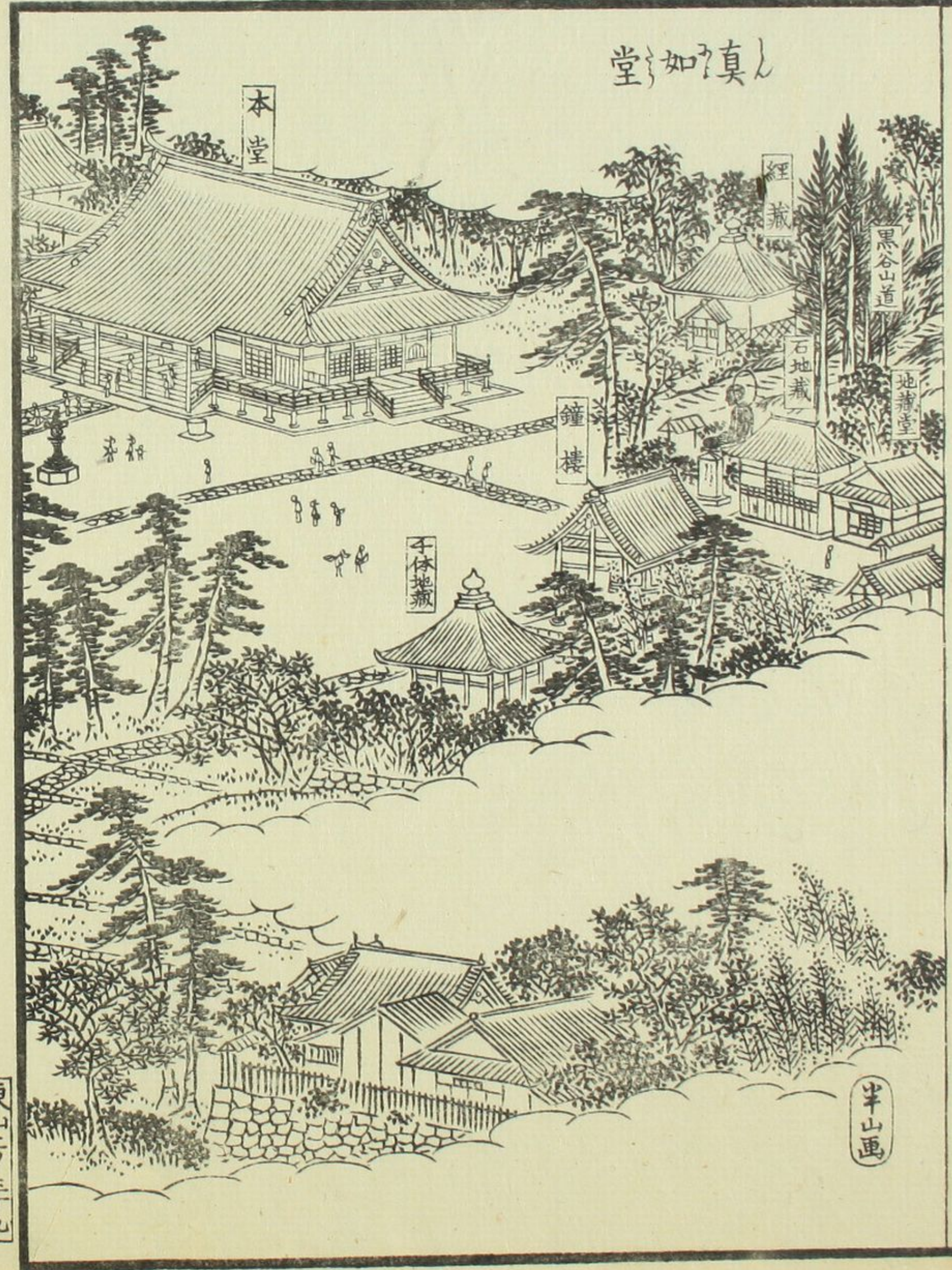
十四年十月小勅使と共に歸朝然も飯朝の船中や彼引聲の中

一向失念の事あり依く大師焼香禮拜祈誓給へ小虚空より

瑣小の弥陀の像香煙の中おあり給ひ失念の文句成就如是功德莊

嚴と漢音中唱へり師佛小對願る吾國小來し給ひ衆生の苦と

度し給へ袈裟と捧る小忽ちこれ小影向し即ち移し包飯朝

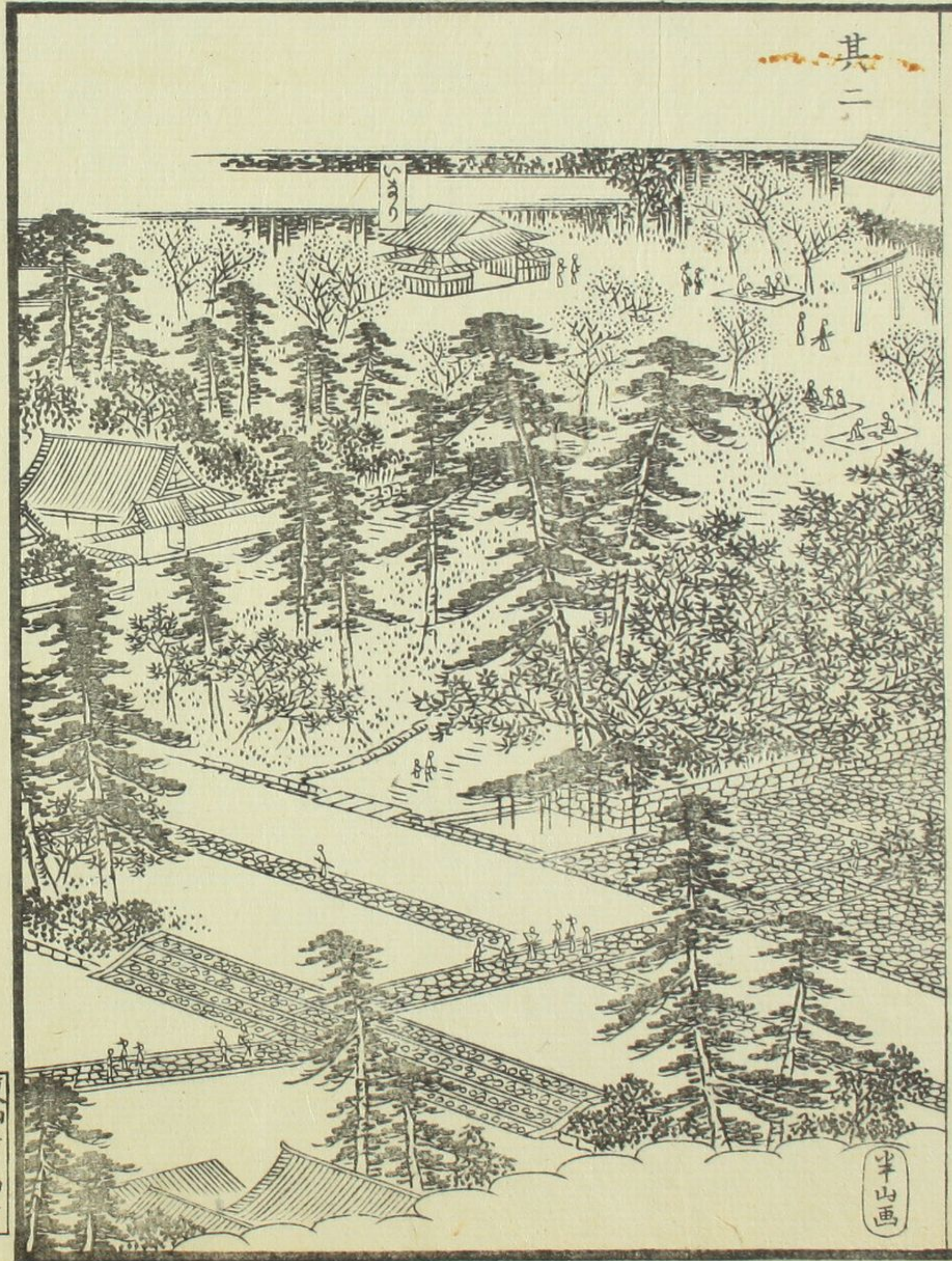




秋季真如堂
 觀楓晚間遇雨
 楓寺靠山山色開
 若紅寒翠映行杯
 不妨急雨驚吟席
 一洗幾多秋錦來
 中島規

野山小みづ
 念佛のれ
 去來

去來前の理の當寺南の墓地あり
 向井氏落材舎と早稲田屋の産
 中島規 京師小出浴西境小住より
 至永九年九月十日及び行年六十二
 舊門の十指の艾傳の世小知り



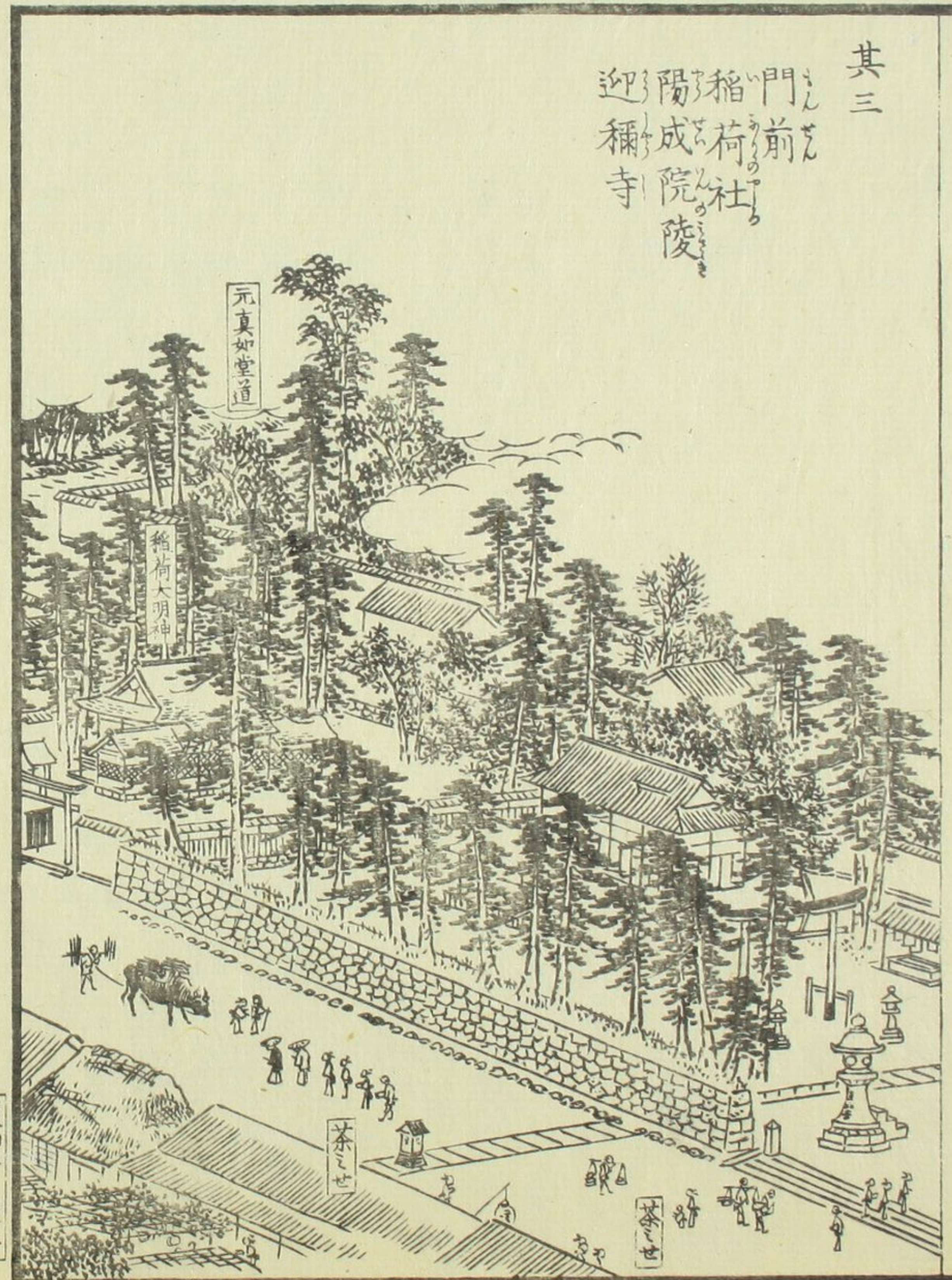
其二

東山三十四

半山画



迎林寺
 陽成院
 半山画
 茶之世
 茶之世



其三
 門前
 稻荷社
 陽成院
 迎稱寺
 元真如堂道
 稻荷大明神
 茶之世
 茶之世

東山二ノ四十一

爾後彼一寺の靈木を以て阿弥陀佛の立像を二刀三礼して刻彫せし御
長三尺三寸九品東迎の印當寺の本尊なり又船中出現の化佛と胎内
小松む然る小眉間の白毫（まげ）具せざる小師の白く當山圓頓の行者四種
三昧の本尊と成せし有る小佛像三回めぐり揺せし師なき然らば聚
洛市中（しやうじやう）下く衆生を引接し給ひ殊（こと）あら罪障重き女身等を救ひしやと
有るれ此時三回領狀しつり此故（ゆゑ）自ら生身の佛射（しやう）や（ま）せし重く
截彫（せつてい）せしきわらひし白毫（びやくばう）を作らば其後聚樂安置の靈地と云ふ
求め未だ決せし年月を経く先（まづ）敷山の常行堂（じやうぎやうだう）安置し大師入滅の後
圓融院（えんじゆういん）の御宇永觀二年甲申の春敷山の住僧戒算上人の夢（ゆめ）に老僧來
つ告く曰我は是常行堂より來りたる市（いち）中（ちゆう）出（し）一切の群生と利益
殊（こと）小女人を度（あ）げば急（いそ）ぎ下山せしむべしと言へり此事度々及（およ）び（お）靈告
明（あ）かり故（ゆゑ）一山の衆徒（しゆうと）を招（ま）き（ま）如（ごと）此（の）義（ぎ）を披（ひ）露（ろ）し三院の衆徒の中（ちゆう）
信仰せざるもわり又ハ大師在世の靈現（れいげん）を以て押（お）さ（し）むも如何（いか）と（も）

有る遂（つひ）も同（どう）く先西坂の麓雲母坂の地藏堂（ぢざうだう）に（こ）奉（ほう）るなり此夜又夢
中（ちゆう）老僧來つ云く山城國神樂岡の邊（はた）に長尺余の檜（ひのき）一本一夜（ひとよ）生（な）じり
所（ところ）ありん則（すなは）ち佛法有縁の所末世相應真正極樂の靈土なり（今真正極樂寺）
の号（な）は冥夢上人靈告（れいこく）小鷲（しゆ）き（き）早朝（さうしやう）弟子（でし）を下（くだ）し彼地（あつち）を見せしむり
白河の女院（にしろのむでん）の殿舎の境内（けいん）に檜（ひのき）出生（しうじゆう）たり元真如堂（げんじゆだう）の敷地是なり又其
夜（よ）白河女院（にしろのむでん）の御夢（ごゆめ）に老僧來つ曰我ハ敷山常行堂（しきさんじやうぎやうだう）より來
り女身（によみ）濟度（しやくだ）の誓願（せがね）ふ（し）つ（つ）聚樂（くわらく）下（くだ）る后（ご）の殿中（でんちゆう）に（こ）至（いた）ら（し）告（つ）ぐ（ぐ）へり
女院此靈夢（によでんしれいむ）に（こ）る（る）き（き）敷山（しきさん）小使（せうし）の者（もの）を遣（つか）し給（たま）ふ上人（じやうじん）ハ又檜（ひのき）出生（しうじゆう）の
事（こと）を尋（たず）ね（ね）求（もと）む（む）為（な）し（し）蕭（せう）下（くだ）し（し）僧（そう）と（と）雙（さう）方（ほう）西坂（さいばん）中（ちゆう）行（ぎやう）合（ごう）たりた（し）ひ（ひ）靈
現（れいげん）の（よ）を（を）語（かた）り（り）分（わ）け（け）る（る）斯（ごと）有（り）程（ほど）先女院（せんむでん）の殿中（でんちゆう）に右（みぎ）の尊像（そんざう）を移（うつ）し奉（ほう）る
此時（このとき）これ一條院（いちじやういん）の御宇（ごう）正曆（せいりき）三壬申年（さんじんしんねん）の秋（あき）なり頓（とん）地（ち）を（を）點（てん）し佛（ぶつ）岡（おか）と
か（か）し（し）草創（そうじやう）の時童子一人蓮華織（れんげあ）の錦（にしん）小土（こつち）を（を）裹（も）り持（も）ち來（き）り上人（じやうじん）ハ
語（かた）り（り）曰（い）此（の）是（ぜ）天竺王舍城（てんぢくしやじやうじやう）耆闍崛山（きじやくけつざん）の土（つち）なり釋尊觀無量壽經（じやくそんくわんむりやうじゆきやう）を説

りて無数の衆生法を聞く得道一頻婆娑安羅及び韋提希夫人往
生を乞ひ阿闍世即善道不歸たり其説法の座下の土なり吾長く當
山を擁護せし上人の慈悲真正真如の真心を觀んがゆゑ小來現は
七宝の壇を築く此靈土を収め其上小如來を座せしめ奉つれり上人信
敬し是をうけ如來の兩足の下小收む又童子の曰吾名を蓮華童子と
稱ひ吾安住の地如來の座下の山小於く醍醐味の清泉あり佛閣の後
門小中つゝ闕伽井を堀へ彼邊小住せんとい畢つて去り是に依り井
穴堀り清泉出現り童子の教に任せし靈水の所を彼門小中靈土を
壇上小納め其上小御厨子と建立し同五年甲午八月十一日如來を遷
座し奉る是則女院殿舎を以て造りて壯嚴珠玉を鏤り寄附し
戒算上人此小住職し天喜元年癸巳正月廿七日小化し壽齡九十一
歳也以上縁起の採要 服士の兩尊小始め安置する所共小靈驗の像小縁起小
のせし詳し然る小近世洛陽小於く燒失し今の像は其後作る所也

當寺は往昔此所小有く文明九年三月廿九日小洛陽小迂り其後東山
慈照院義政公の尊崇小つゝ同十六年甲辰六月朔日又此地小迂り返
り其後又文龜三年癸亥四月七日再び洛陽の元の地方小つゝ然るを
元祿五年冬煙燒の故小同六年又今の地小迂る
後醍醐天皇吉野より御寄附の佛舍利あり綸旨左の如し

佛舍利一粒被爲御寄進之間永當寺爲靈寶
勤行不可有懈怠天氣如此仍執達如件

正中二年三月六日

右少辨

真如堂別當 御房

戒算上人像 画像黒法服地紫紋白五條尤小向ふ 青蓮院尊證親王筆寄附り所也
戒算上人塔 本堂の良方あり天喜元年癸巳正月廿七日寂壽九十一歳
當山縁起云應仁二年八月三日逆乱小依り西塔黒谷小移り 應仁の兵乱の時
淑山の西塔黒谷の青龍寺小縁起 文明二年三月十九日穴太小迂り 練坂本堂 同九年三月廿六日



山王祠
 不動尊
 東三條女院塔
 山王

半山画



真如堂
 東三條女院塔

真如堂前山

梅室
 やほき
 松子抱き

東山二四十四

洛陽一條町小移住と云

毎年十月六日夜より同十六日の朝に至る法事あり是を十夜と稱す是
伊勢貞國の靈夢の告小因とら也と云十夜の法事と云は原當寺より始り
後浄土宗より又これを修行と云り

時々々々々々法を捨つる五劫思惟いたがごとくも 真如堂如來

玉葉 弥陀たのむ人ハ兩夜の月かれやま情ねる死へこそゆけ

是はま如堂に詣りて世の悲願の祈りま事を思ひて我々の罪障をまき
幸とせられしもの

稻荷社日門前の北あり 拜殿日下壇あり 鳥居日上あり 額日本最初稻荷明神社 清水告
實秋筆

寺記云往昔當山の住職三の峯稻荷明神と尊信常小詣り一夜夢み

明神現れし鈴聲山ハ清淨無垢の靈地なり速小勸請せりと告あつて

夢覺ぬ夙不起堂前と見れば奇童一人イミ手小密珠を捧け曰我是稻荷の神使

たり此密珠を汝小与ふべとの神勅なりと授け忽ち白狐とありれ飛去ぬ

神慮奇異なりと急ぎ三の峯小詣り別當増圓小此りと告は我昨夜冥夢と

感ぬ其体正符合せりと互小諾く歡喜し則神像と別當より寄附せりめり故小當

山小社と嘗て佛法擁護の鎮守なりと云 例歲二月初午の自諸人群奉く願ふ縣と

山王社日西隣り祭神十禪師 御供所日所東傍あり

陽成天皇陵日門前西側人家の裏あり高十三尺余東西十二間許南北九間許總根廻四十間
許の家なり陵上小樹木あり小篠生茂あり

日本紀畧曰天曆三年九月廿九日己巳此曉太上天皇山朝于冷泉院春秋
八十二即

奉移圓覺寺十月三日壬申今夜奉葬於神樂岡東地十一月十八日丁巳日

於圓覺寺修陽成院七々御態

大鏡裏書曰天曆三年九月廿九日崩于冷泉院春秋
八十一同十月三日奉葬神樂岡東地

元真如堂真如堂北東下壇の地なり真如堂の本より山常行堂小在せり時一條院の母后白
河女院又巖山の戒算上人あり末世女人湊度の為聚洛上下るへ其所より又余の
檜千本一夜小生じりて靈夢あり忽ち白河女院の殿舎の境地小檜木生出り其所と

其時の旧地なり 本尊阿弥陀佛立像三尺二寸
慈覺大師の作 白河院宸影同女院御影共小画影

蓮華童子附屬瑠璃壇真如堂草創のとき現れ天竺者開峯山の土と持来り戒算
上人小授りて委く由縁をわたり我をく松岡の辺り小住り仏法

擁護する一岡加井と掘りて醍醐味の 醍醐水堂の北下壇の
地あり

清泉あり是我住所なりと語畢去ぬる古跡

東三條女院塔 右同所あり五輪の石塔婆なり女院一條帝の母公あり其地ハ別離

迎稱寺 真如堂門前の北あり南向時宗より京極一條あり故に一條道場と云

山王権現社 右同所の南上の方あり東向當村の生土神なり例祭九月廿日

芝藥師 洞西隣り靈芝山大興寺と号し旧ハ大宮五辻あり今芝藥師早と云

本尊阿弥陀佛 五像三許 殿檀不空羅索觀世音 五像五尺許惠心作并

本尊 留璃光佛 座像三尺五寸運慶の作十二神將立像三尺許同作左右列

蜀関羽像 殿檀安置関帝の額をかき南宮武勢の筆なり

今汝は百戦百勝の術を教ん大元帥軍神と求め信仰せしと其夢の如く元朝言送

求る小関羽將軍の像を送り尊氏汝寺の傍に安置し之を庄園小丹川波東保勢

川天祐寺小野村等と寄りて其地教書今尚寺あり又家臣高師直が状あり且

後鳥羽院御寄附の仏舍利あり付室と云其初芝藥師早とあり其後京極今出川

南に移り元禄五年火焼の後

この地ふりつる

極樂寺 洞西隣り宗吉時宗藤澤に属し其地ハ天台宗あり惠心僧都の

本尊毘沙門天 五像五尺三寸 殿士 左大黒天菅神御作二尺許

中頃鹿苑院義満將軍當寺を皈依し給ふ後子廢せしを一遍上人再興せ

時宗より舊此寺も芝藥師の北に有るを後世此地小轉り所なり

東北院 洞西隣り時宗あり藤沢に属し本堂の額東北院の三字ハ

本尊辨財天女 座像二尺三寸許 殿士 左毘沙門天王右摩迦羅天

関白道長公像 衣冠束帯座像一尺許道長公関白兼家公の男正一位攝政太政大臣

和泉式部塔 寺内 雲水井 堂前の西 軒端梅 堂前 鎮守祠 雲水井の南隣り

抑往昔東北院より上東門院の御願より御父御堂関白道長公の樓に

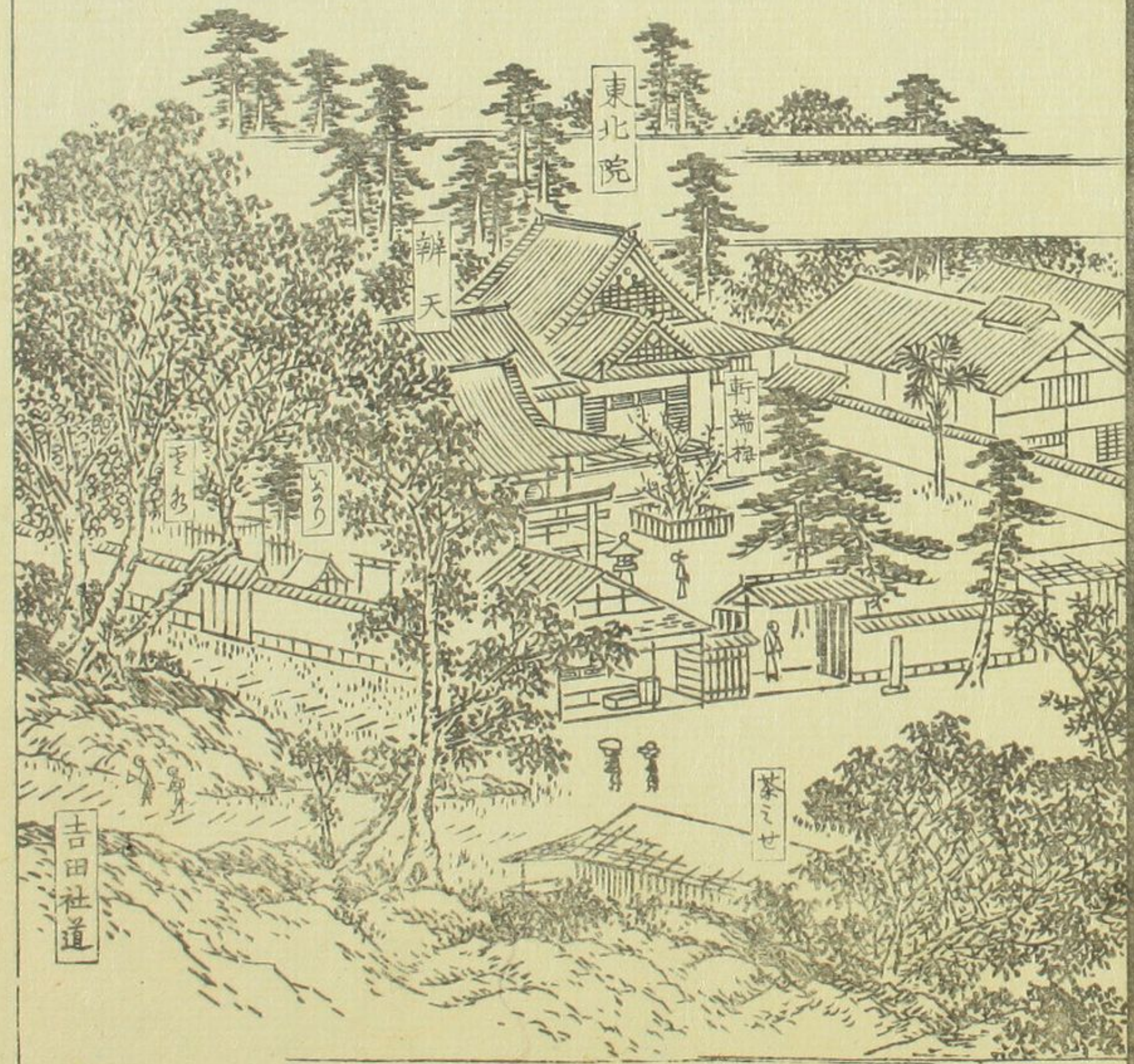
まは法成寺の傍に造らせしを續世継小見えたり拾芥抄ハ一條の南京極の

東なる上東門院の御所法成寺の内東北の隅なり扶桑略記ハ長元三年

八月廿日上東門院東北院を供養有る由と書り落慶の導師僧正慶命なりと

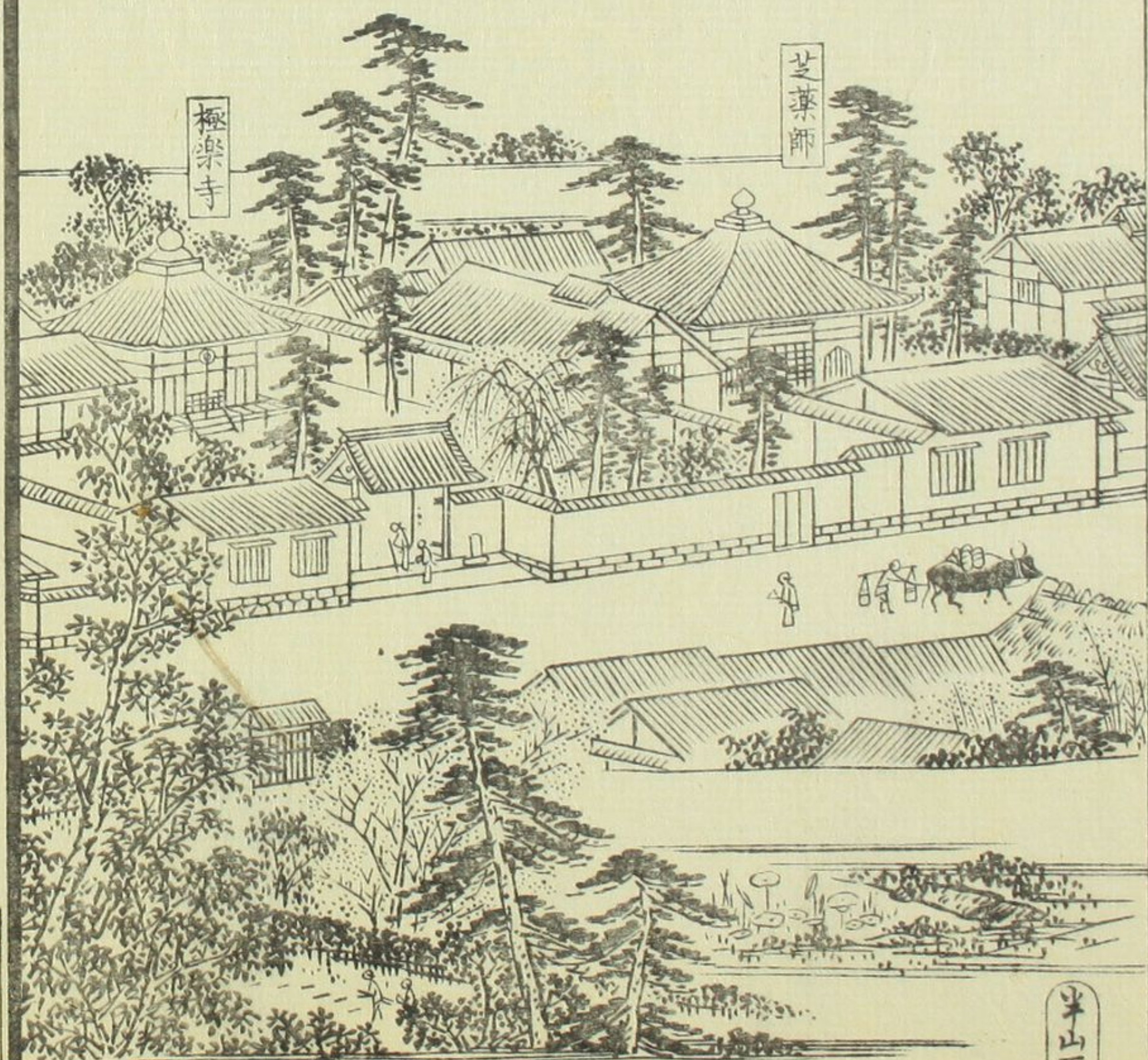
釋書小載たり又永承幸十月十三日出 天皇東北院小行幸あり由百練抄小見えたり

鈴聲山下妙音
 臺曾在九重東
 北隈門外車從
 火宅出簷前梅
 映雲沼開創管
 佛閣詔傳教永
 鎮王城崇辨才
 爲是歸依同長
 者布金光耀起
 三台
 釋寂道



芝藥師
 極樂寺
 東北院

蓮の香や
 池のほとり
 六和



東山二ノ四十七

然れ古ハ伽藍魏々壯麗中々天台宗の淨刹なり其旧地ハ今の京極通清和院の御門の北遣迎院廬山寺等の地ナリ委花洛陽跡ニテ詔小忠愛ヲ略シ當寺の再興ハ元禄和泉式部の塔雲水軒瑞梅寺今ハ河々ナリ皆東北ニシテ詠曲ナリ後世作ルものナリ東北流のヨリヨリの中ナリ詠と云々後世作ルものナリ

菩提樹院古趾

右同所の辺より北へけり則神樂岡の東の麓ナリ拾芥抄云菩提樹院ハ

後一條帝陵

菩提樹院の地ナリ云

日本紀畧曰天元九年四月十七日乙丑戊刺天皇落飾即崩于清涼殿春秋二十九五月十九日丙申奉火葬淨土寺西原神樂岡東面也中略從今日立伽藍於神樂岡東名曰菩提樹院御葬之間長家以下拾御骨安置淨土寺百練抄曰長曆元年六月二日上東門院供養菩提樹院後一條御墓所裏書云長久元年十一月十日自淨土寺奉遷御骨此院榮花物語曰二條院以帝の御女也故院の御墓所小御堂立させ給ひ菩提樹院と東山をりともろ小三昧堂たせられたる御堂たさせ給ひ云

故院の御影をたき奉りたり

歷代編年集成云後一條院男子不坐御女二條院安置菩提樹院云

櫻本

一歳前云東北院の庭前西北の隅ハ高サ四尺許根廻五同余ナリ塚あり是一條帝并上東門院の御墓ナリ五十年以前より石の御塔あり其後つるの程ハ御塔失せたる近年家の上ハ知財天の小祠と建つ此所ハハの菩提樹院の旧地の松原ナリ今ハ東北院と改所ニ移立合ハ古跡ニ定カケル斯のナリ云々

五葉

梅本五葉の形見ハ花ヤ染ナリ 周防内侍

榮花物語云北の方の墓ナリ小御殿中納言後徳共小梅本小梅本のせ給ひ

梅本五葉の形見ハ花ヤ染ナリ 中納言

櫻本寺旧趾

前日所一説ハ菩提樹院を櫻本寺と号スル様ニつたれ櫻本の名ハ

善樹院の夫より遙のち一条院の時御建立あり寺あり當りたり若くは
四成寺の一名と極本寺や呼ばる或は別極本寺と稱せし寺有たり今詳し

冷泉帝陵

吉田山の良の麓あり山陵志北之畝呼家園處也既被毀傷

皇年代私記云寛弘八年十月廿四日崩十一月廿六日葬於櫻本乾原

或云櫻本寺西北子葬遺骨を山側小蔵むと有ふ大御符合はる

又一説小冷泉院陵北山小野御所あり其の所あり小堂を極本寺や

大塔屋敷

吉田山の東の麓元真如堂の西南あり相傳ふ始真如堂中多塔のあり

別院あり傳ふ在り是

源頼政朝臣堂

今其古蹟詳か百棟抄云治承二年二月七日頼政朝臣菩提樹院の辺

山槐記云治承三年正月廿九日戊子向東山堂云為近隣密々禮頼政

朝臣堂在菩提樹院南辺

同山莊

右同所の辺あり一説黒谷の北の門外あり

東鑑云治承四年五月廿四日入道三品家中山堂并山莊焼云

是則ち高倉官御謀殺宮密三井寺入り頼政泰向の時自ら放火

神樂岡

俗小吉田山と黒谷の北西あり南北四町あり一の壇の丘山なり此所ハ神代

の時天照大神天石窟に入給りより八百万神たり集り神樂を奏其時々

一の山より高野山如意山嶺なり其後事勝神鴨御神以集り神代の樂を奏

故に神樂岡と云なり神系傳見えたり以丘山東の方ハ四の平地あり嶮岨と

僅に竹中稻荷管神の社のあり原東四方の風景よく春ハ桜つ咲く社仏閣の構を

貴賤童を引具破子さえをひき遅日を儀と又兼以又長月の末木の葉の

錦の折々ト此地は来つ秋の日の短きと惜む多し又華舞ハ男女共むれ愛か

なる夏他邦を越たりとも別々岡ハ平穩あり遊鳥便よき又都より比類ありき

君々代を祈るのの神樂岡松も千とをのやとん 衣笠内府

振まくなり神樂の岡のまむの勢 道典

神樂岡より木の枝よりこれおれ新の流をぬ 景樹

草がや下込くわりの神樂をか 巴川

九月草香能引入烟蘿巖徑起紅塵 皆川允

松林自絶磨磨跡刺見綺羅雲外新

卜部家齋場所

右同所あり元京師近衛室町の私第小在夏長貞日記小

文明十六年兼俱卿より移り

本殿 南向 八角造萱葺棟行 大額 日本最上 嵯峨帝宸筆 小額 太元宮 後御宇宸筆

軒の内中央 額 日本國中三千餘座 清水谷實秋卿筆

八神殿 本殿の後あり都合 祭神 神皇產靈神 高御產靈神 玉積產靈神 生産靈神 足産靈神 大宮貴神 御食津神

右八柱の神ハ八州守護の職神ハ齋靈神ハ心府の神也坐り故より皇帝の鎮魂の神

鳥居 右社前あり 額 元本八神殿 後土御門帝宸筆

外宮 八神殿の西隣あり 鳥居 南向 額 外宮宗内宮 八神殿の東あり 鳥居 南向 額 内宮源

日本國中總攝社 本殿の東西あり東の方北山城國始西の方の

山城國中 大和國中 河内國中 和泉國中 摂津國中 伊賀國中

伊勢國中 志摩國中 尾張國中 参河國中 遠江國中 駿河國中

甲斐國中 伊豆國中 相模國中 武蔵國中 安房國中 上総國中

下総國中 常陸國中 近江國中 美濃國中 飛騨國中 信濃國中

上野國中 下野國中 陸奥國中 出羽國中 若狹國中 越前國中

加賀國中 能登國中 越中國中 越後國中 佐渡國中 丹波國中

丹後國中 但馬國中 因幡國中 伯耆國中 出雲國中 石見國中

隱岐國中 播磨國中 美作國中 備前國中 備中國中 備後國中

安藝國中 周防國中 長門國中 紀伊國中 淡路國中 阿波國中

讃岐國中 伊豫國中 土佐國中 筑前國中 筑後國中 豊前國中

豊後國中 肥前國中 肥後國中 日向國中 大隅國中 薩摩國中

神樂殿 社前の東傍あり 参籠所 日西傍あり神宮 中門 本殿の正南あり

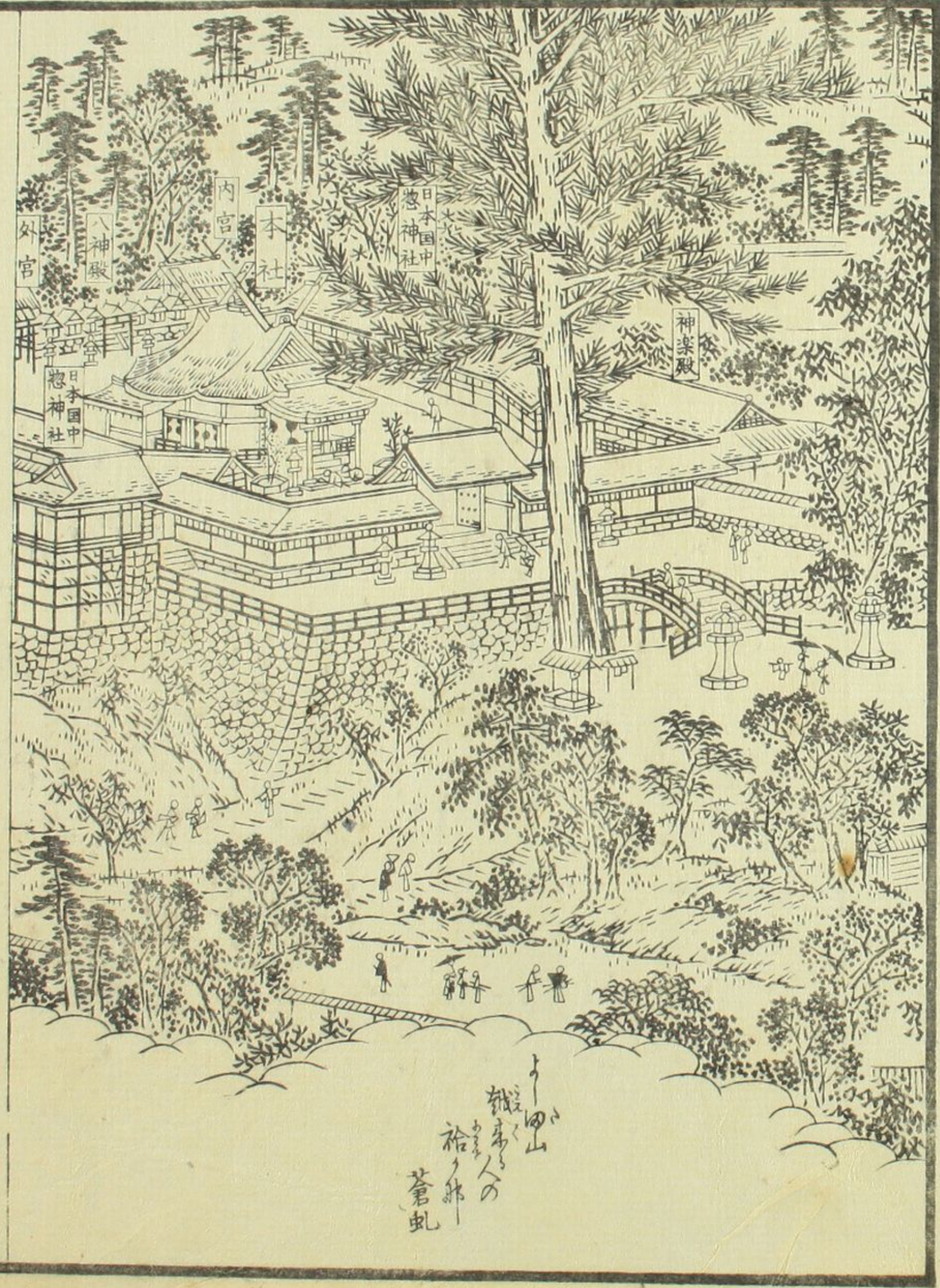
勅使塚 洞所橋の南あり勅使著座の壇あり 日降坂 木瓦社の前本殿あり

木瓦社 本殿の西下壇の地あり南向祇園社中の一座あり

西天王社 日向西隣あり 祭神 素盞烏尊 例祭六月十日神輿一基あり

所以ハ其ノ聖護院社の東二里あり有又岡崎日天王社あり則東西あり

岡崎と東天王との社と西天王との社と然る小故あり



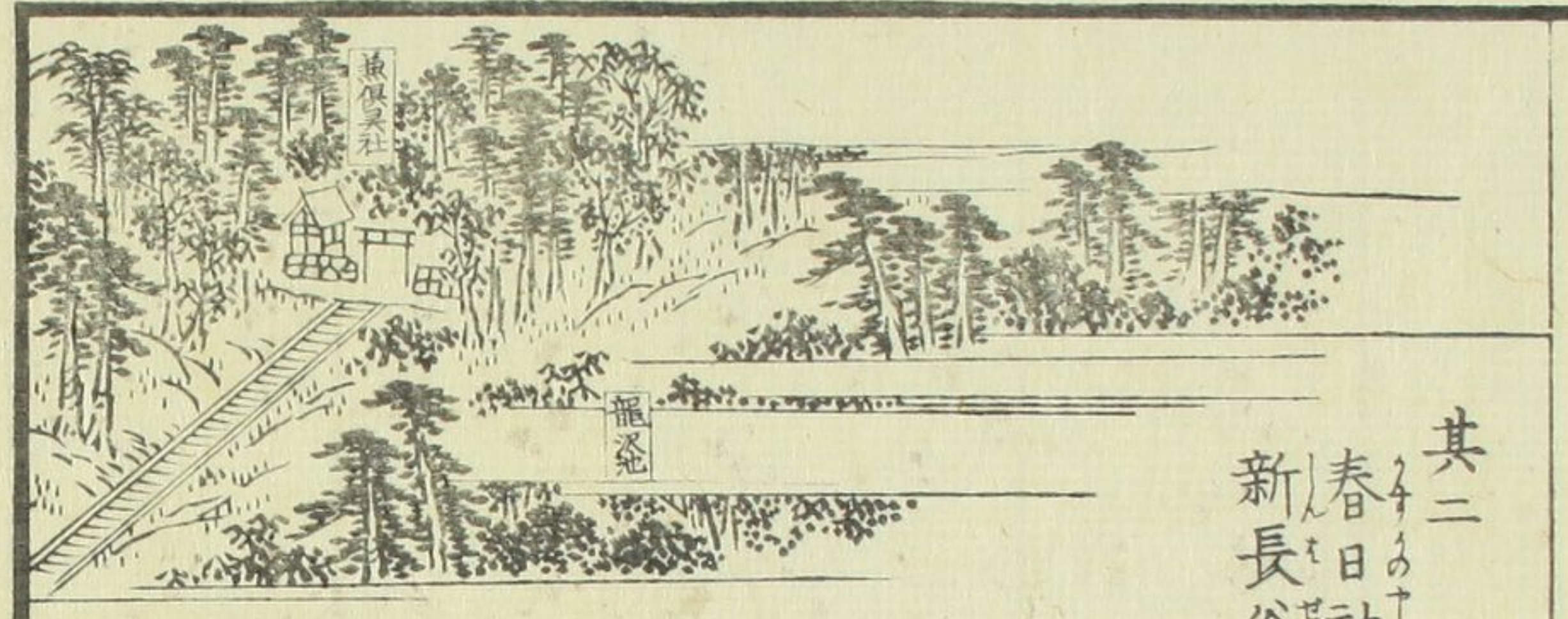
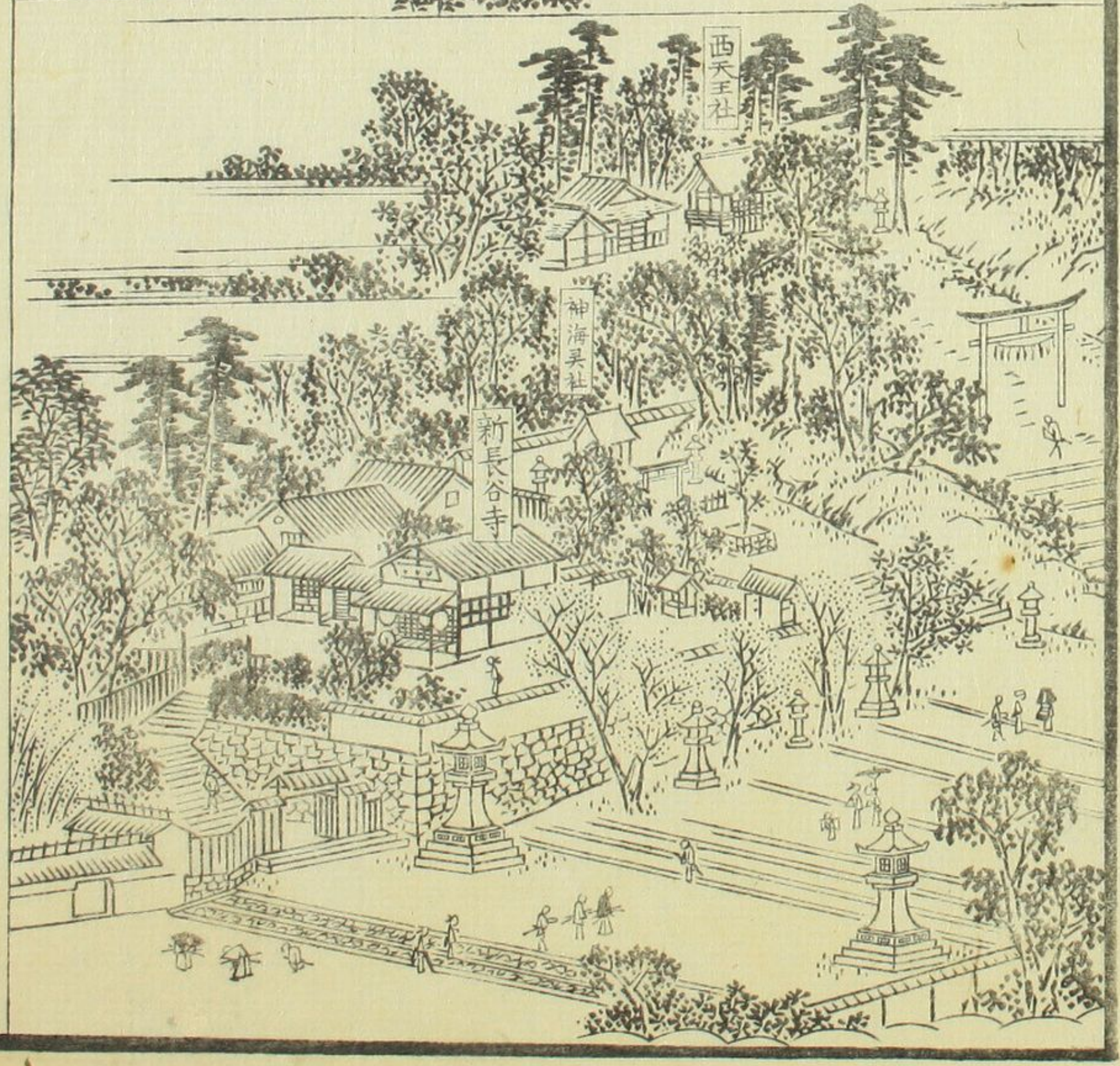
山
 神樂殿
 日本國中
 蒼虬



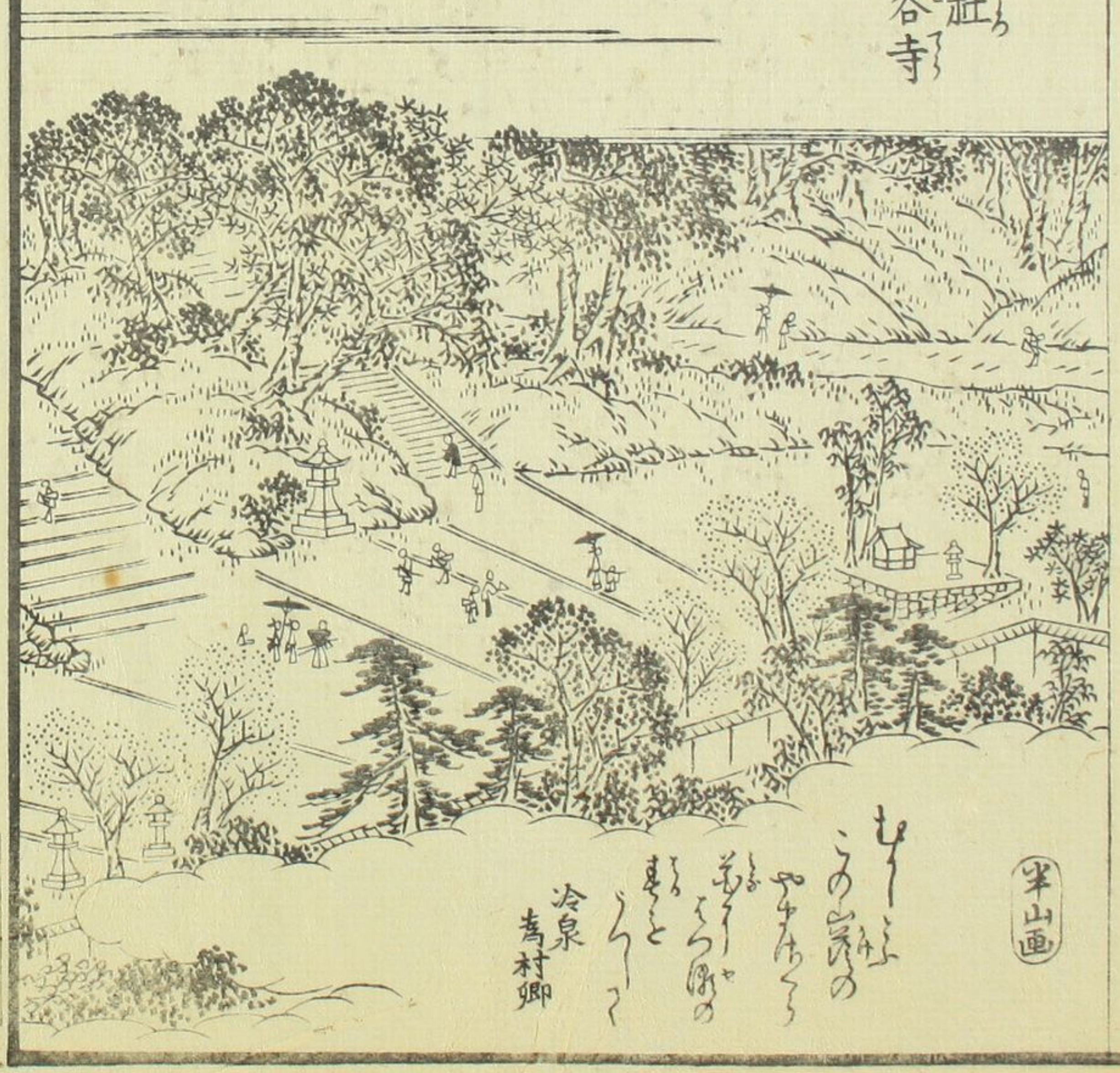
神樂岡
 齋場所

半山画

東山二五十一



其二
春日社
新長谷寺



冷泉
青村卿

ひ
の
家
の
か
み
の
ま
つ
り
の
ま
つ
り
の
ま
つ
り

半山画

東山二五十二

菰原家

新長谷寺の西中より家領千石吉田兼作朝臣二男と菰原と称す

神龍院

豊国社の初官たり。社廢後以新住せり。日所の南にあり。禪宗南禪寺に属し其始も吉田の社家ト部兼俱の男僧と云ふ。号に南禪寺に属し其始も吉田の社家ト部兼俱の男僧と云ふ。日所より南にあり。禪宗南禪寺に属し其始も吉田の社家ト部兼俱の男僧と云ふ。

神恩院

日所より南にあり。禪宗南禪寺に属し其始も吉田の社家ト部兼俱の男僧と云ふ。号に南禪寺に属し其始も吉田の社家ト部兼俱の男僧と云ふ。

吉田神社

右日所の北にあり。神樂岡の中央西の麓に社前門の左右廻廊列し西の傍に御供所あり。鳥居は西の方二所あり。道の左右松の並樹あり。例祭五月下子日。十月中甲日。

本殿

南向。四座。武甕槌命。齋主命。天津兒屋根命。姫大神。南都春日社。

ト部兼右二十二社

注云清和帝貞觀年中鎮座。中納言山蔭卿始。これと

渡一奉

同兼俱記云當社、藤氏の崇敬他小異。小依。累祖兼延勸請。云

御堂関白御書云

奈良京の昔春日社と云く氏社。興福寺と云く氏寺。

より平安城の今

吉田社と云く氏社。法成寺と云く氏寺。社頭の具廢

小随く其

藤門の榮衰と測る。者一天安全四海乎定殊。小當氏の繁昌

祈禱と抽ん

下者之を慎む。忘る事莫れ。云々。長和元年十一月十八日。神道長左衛門権

新燒古

百々せと。和四くらのを。行々。能ぬ。吉田の林。まろく。れ。兼。漁。千首。程ら。き。吉田の字の神。字。岡。と。く。松。尾。の。聲。と。あり。は。為。尹。

若宮

社前の東の丘あり。神樂岡神。若宮の北の小祠あり。當所の地主神あり。神名式

ト部兼俱靈社

日南山にあり。後奈良帝勅号。龍澤池。日所の南にあり。傳云南都猿

吉田大納言經房卿亭趾

宣胤卿記云神樂岡西麓神龍院門前跡云々。伊豆介光房の男右中弁より太宰権帥民部卿を兼り

又大納言

任り吉田と稱し其露寺家の先代なり。民部卿經房は吉田堂の先代なり。伊豆介光房の男右中弁より太宰権帥民部卿を兼り

白ひ

の林の法の系ちり。く。赤い。墨。後。の。袖。穿。蓮。

中御門宣胤卿亭古趾

神龍院の北の門前跡なり。宣胤卿記云永正元年八月

又云永正十四年七月十二日

泰河東墳墓元祖及二親理法墓列祖七代廟云々。墓所神

代の

の。あ。を。を。残。り。林。の。陰。に。れ。ん。山。本。の。後。も。あ。り。宣胤卿

兼好法師菴室古趾

今詳くあ。び。一説小神龍院の内小住せり。或は神龍院小

師ハト部兼頭の子たり。博覧強識あり。和哥和文小巧なり。當時兼好頼阿淨弁慶

運を以て和哥の四天王と稱し。後宇多帝に仕へ。左兵衛佐小任。五位の藏人となり

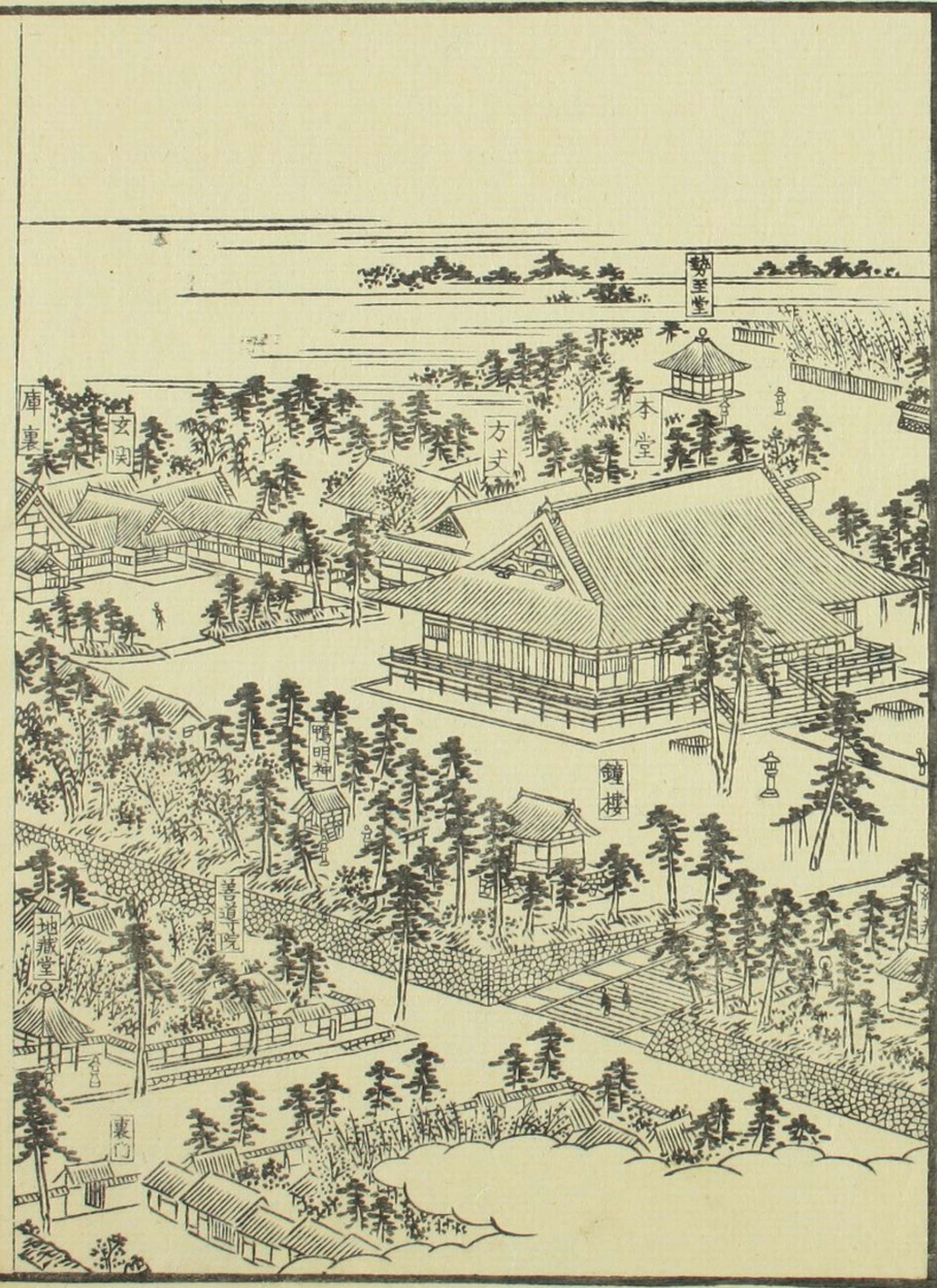
帝。明。く。後。藤。原。の。修。學。院。に。入。り。名。の。兼。好。と。以。て。法。号。と。し。後。横。川。小。登。つ。く

深。く。教。誨。と。置。け。り。雅。雅。と。り。常。小。日。心。友。の。得。難。一。獨。燈。下。に。坐。し。書。と。読。古。人。と。友

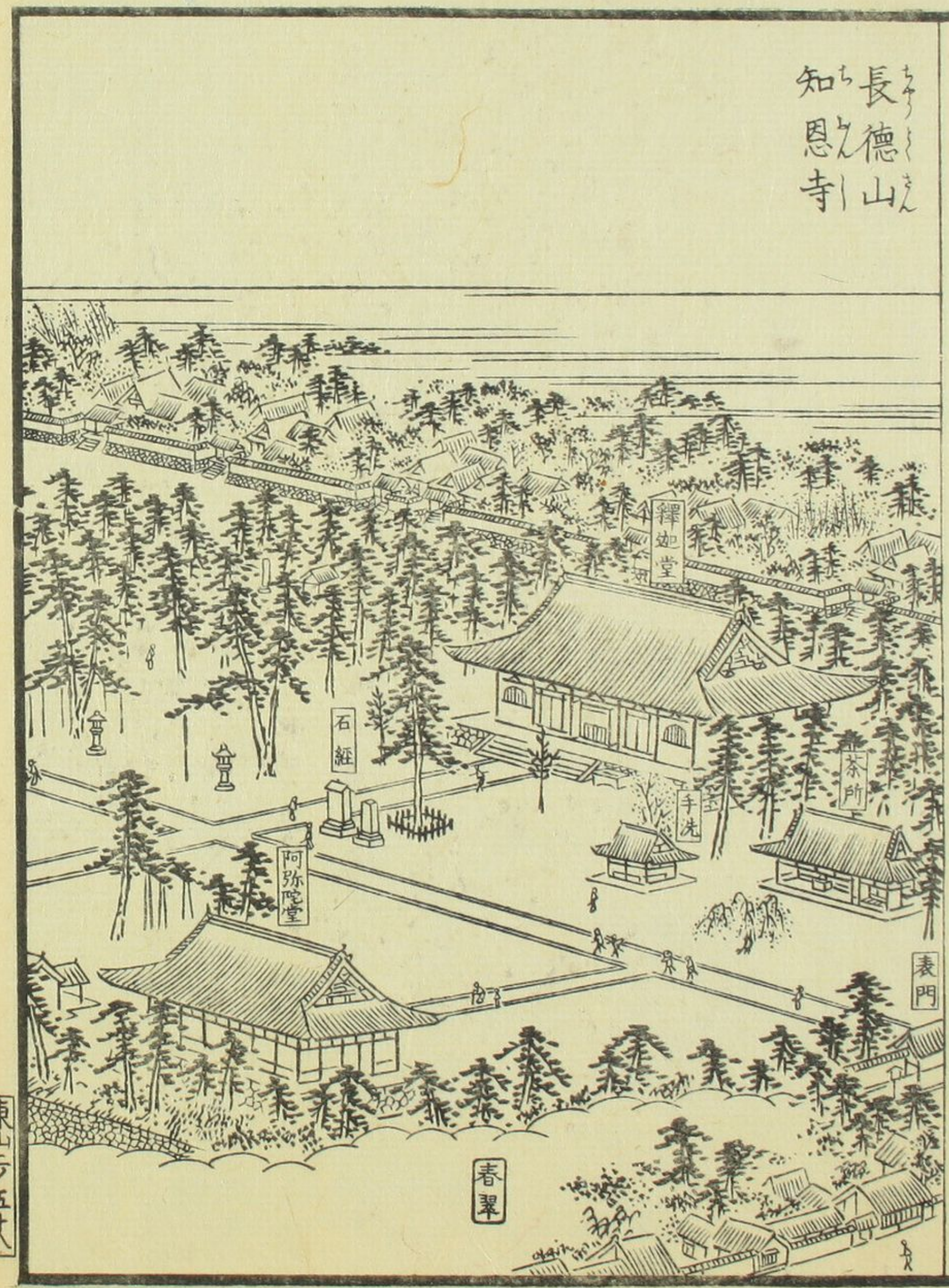
こ。を。を。送。り。世。の。雅。談。の。常。小。日。心。友。の。得。難。一。獨。燈。下。に。坐。し。書。と。読。古。人。と。友



法然上人塔 寺境ふわり中央元祖上人の塔ありく傍三茅二世勢観坊源智上人の塔あり其外第三世の柱職より三十九世の上人小至りくの塔左右より六條局塔貞松院蓮生と号し後西院の女房より六條家の女たり八條宮の母公いと小六條局の塔榮雲院と号し後光明院の局より女一官の母公たり
 抑當寺に往昔慈覺大師の草創ゆき賀茂下上社の法樂修法の寺なり
 始り神官寺と号し 只今出川の上相国寺の地なり慈覺大師彫刺の像と安義満公相国寺草創の時當寺と油小路一條の北小移り又其後永徳三年鹿苑院相国寺南門の南小移り寛文二年又今の地小轉じ
 當寺其始り天台宗たり嘗て法然上人賀茂下上と信敬あり或時明神上人の枕上小來り告ふや神官寺の釋迦佛の諸人吾神相とかり諸願を祈り吾その奸直を鑑き靈應を施はされ今より寺を以て汝小附与は此小於て專修念佛の立義を説く海内其化小順ぶ吾亦之を擁護せん加之社司の數輩亦此寺を以て上人小寄附をきくの靈夢の昔有程小神官驚き謹く寺と上人小与上人又神勅ふませ此小任職き遂小專修の法要を説き天下小一宗を發興り又或時鴨の明神懇望有末世



長徳山
知恩寺



東山ニテ五十八

春翠

衆生のため一枚起請と書しあり是より當寺を改め念佛の道場と
爾後徒身勢觀房源智備中守平師盛の子中小當寺と譲り
然れ源智上人當山第二世なり曆仁元年十二月十日此寺於第六世智恵
如一國師後醍醐帝御依の此上人小至つ法脉嫡々相兼け時小後醍醐帝の
御宇元弘元年の秋日本國中大小疫屬流行民多く死に帝憐れ給ひ
諸の祈禱ありとても更小験なり其選命小洩たる者獨當宗を以て
於浄家也鎮護國家の修法ありとを聞召され當寺第八世善阿大
小命是と持念せしむ善阿更小餘行を七日を限つて念佛を事
一百万遍小至り疫病忽ち小退ひ天下一同小安堵り
帝大小歡感ありく百萬遍の誦を賜り又弘法大師筆跡六字の名号
法賜其字畫のあり所皆劍をかりて以て利劍の夫より當寺小於此法を修
むる時は是を以て本尊と名ひ結衆十人一千八十珠の大珠數を廻ら
是を百般せれ二百萬遍を得るなりこれ依り世上災疫も毎小御祈願の

勅命を受じと事なり又毎月十六日天下泰平の祈念を以て修り且
當寺住職紫衣香衣の綸旨御祈願寺の綸旨數通并御教書等あり
後花園院の文安五年數日大小地震以此時御祈願の綸旨云

當寺爲御祈願所須專浄土一宗之印通奉祈
朝家千載之榮運者 天氣如此仍執達如件

文安五年五月二十一日

左中辨冬房

知恩寺長老老大譽上人街房

山城名跡志云當寺始めの一人名賀茂川原屋法然傳小書明りなり按此山城義
いふ其故當寺の旧址河原あり河原何を寺院と稱河原屋
いふや疑ふる瓦舎神道於浄國を忌又鴨の脊院伊勢の丹宮
小忌詞あり寺院と稱瓦尊と神書小同寺院と稱瓦舎とあり當寺神
河原屋と書の後云
松蔭硯當寺付室の隨一なり硯硯趙州の宋玉平相國清盛小わ所なり然
法然上人を招請導師を以て布施をなり硯紫石やく作まり
硯の堅七寸三分横四寸八分厚一寸三分漸月形堅彫入り
右硯の記南禪寺月舟和尚享祿二年小作りとら二卷銘の序次小出り
後相原院以硯御獻覽の時内侍の報書一通あり

幻雲稿

松蔭硯 銘序

云昔壽永三年春平氏一門城守于攝州一谷源判官義經奉勅攻之平氏敗績重衡見生擒嘆蕉沫之命在且夕而招黑谷法然房源空為授戒師聞淨土法曰贈一枚硯表檀觀且曰此硯吾先君清盛相國曾齋黃金若干介奉獻趙宋天子天顏有喜輒賜此硯先君秘為至寶付予小子異日置師座右染麝煤揮鬼顧書陀聖號則吾本願也云法然沒後此硯藏於知恩寺寺在今出川此即賀茂神宮寺也安慈覺大師彫刻丈六釋迦像故名釋迦堂又呼賀茂河原屋司神職者延法然居焉後平氏小松之內府重盛之孫勢觀房源智為主改云知恩寺源智備中守師盛子也此硯平氏累世奇玩也源智護以至末孫鹿苑相公欲建相國寺於彼地而移此寺置小河西也應仁兵亂之初寺既罹災硯亦失而不知所在矣江州篠原正琳一箇野僧也自何得之被蓋囊藏歷歲久矣老病相逼急于修冥福大永二年壬午孟春二十八日托其心友寄附知恩寺結來生緣翌日逝矣

享祿二年己丑 前南禪退衲月舟叟壽桂書

北白河殿

百萬通より卯辰の間二町をり其古跡あり

後二條院陵

右日所の路傍の北より帝陵記日後二條帝陵山城國愛宕郡北白河村畑中

紹運錄云後二條院德治三年八月廿五日崩春秋葬北白河殿

雍州府志曰福塚ハ神樂岡の西北知恩寺の東あり按之ハ初修寺家一代五條大納言國細卿家甚富より曾く五條の内裏を造り又治養四年平相國清盛公の勅よりつく都を攝州福原よりうつし其時國細を令り里内裏を造りつむのりやむるがむる雙ひき大福長者なり平家物語にも見ゆれば世人福家と稱するものなり云々
山州名跡志云此地北白川鎮なり其四境ハ西ハ百万返の西の門前と云ふなり南ハ北白河に至る往還道と云ふ道の南ハ吉田鎮なり北ハ田中鎮なり中頃陵の巡り四やう常々水あり
家少ハ天神ありと思はれをたけ三十年前迎隣吉田の内小住りのあり元或武家の主ハ盛アと云ふ是をこのむ者あれとも恐怖き登屋來こを得は彼者れ取へ上アと云ふんは中ハ小地あり首を上こやむ勢ひあり強機覺え身毛た
家少なる発熱開限死はと云々
二軀石佛 陵の東白河道の左傍あり二体とも坐像なり四尺許甚古作や希代の
大佛なり合運國云密德三年三月北白川の佛像動くと云ふ若以像を
むる半傳云云ハ以像を動かす事あり秀吉公これを聞多し希有の事
なりと云ふ聚樂城よりつりまると然る事この像夜が音を発し白川へ返せ鳴動
これなりと云ふ元の地へ移しをり其時車を造つて是を率たり其車四十年前より
猶有と云ふ山州名跡志小見え
白河 委ハ北白河より下所の名あり銀岡寺の北より是則河とせし所の名
河ハ里の中を東より西にかりる民家より南北より建つ古寺多し里河花松

御花滝等と詠せり
土人云昔ハ白河南禪寺の北より西へ流れ三條の北より鴨川へ流る合へり此流を
限りて北の地を北白河と南の地を南白河といひ一やと
一説ハ白河ハ白河と号する地ハ浄土寺村の北今の白河村より鴨川の東を限り九條の辺
つたるまゝ九條白河といふなり
尚白川の名源ありて有るも是ハ次篇洛北の部小出を以てくふ畧
拾遺 春よりを休えは風ふは波のそふづめろまろ河はきと 定家
玉吟 波の音の松の風おやあちろ河のゆき 家隆
風吹ばまことの波もまをろ河のゆき 景樹

上粟田 郷名なり凡白河の辺より吉田黒谷の辺より上粟田郷と稱せ見
栗田山莊 上粟田の南吉田の北ありと云雁州府志云東明寺神樂岡の北上粟田の南あり
左大臣在衛公別業の有一所たり茲に於て尚齒會あり今其跡存に云々
拾芥抄云東明寺神樂岡北左大臣在衛の別業尚齒會あり栗田殿号以
勅撰名所和歌抄云栗田殿 神樂岡 在衛卿宅山蔭中納言旧跡也
著聞集云尚齒會ハ唐の會昌五年三月廿三日白樂天履道坊あり始めてをいひ治ひ
々々我朝ハ貞觀十九年三月十八日大納言年名卿小野の山莊ゆく始り行れり又安和
二年三月十三日大納言在衛卿栗田の山莊ゆく行れり其後天養元年三月廿二日大納言
宗忠卿白河の山莊ゆく行れり

東山別業有水有花水可與人心對不竭
暮春藤原相山莊尚齒 會詩序 菅三品 東
花欲與我道久而弥芳云
浄土寺古蹟 此寺今の浄土寺村より西の凡白川の流の西ありたり 東山別業の山珍僧正任職
号は即ち此寺なり當寺文獻年中浴陽相國寺の西に在り今室町今出川の地築山町其
所なり其寺の鎮守ハ山王十禪師と稱請り其田地今田の字のり又ハ神當地の生土
中名今村中と号り生土神と尊信り又云此寺惠慶法師の和哥の序と作る浄土寺之
法り今村中と号り生土神と尊信り又云此寺惠慶法師の和哥の序と作る浄土寺之
山城名勝志云今草堂二字あり此寺を安は是當寺の本尊と云 山州名勝志云此村の徳堂の
本尊阿彌陀佛ハ是則惠照院公の持尊佛なりと云有右同佛村考
今昔物語云明教ハ延昌僧正の弟子と云 止支と成上と僧正と成上と

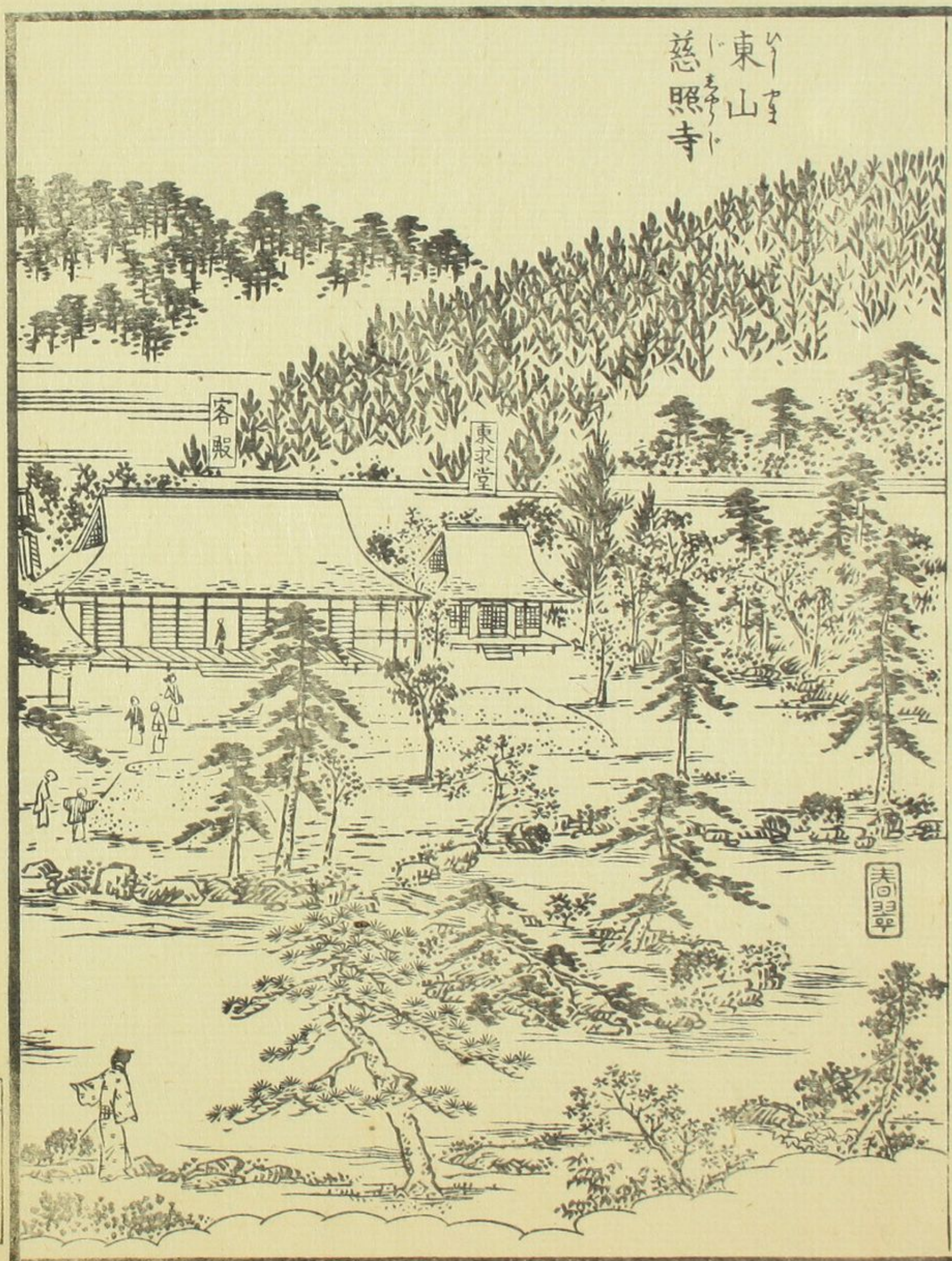
浄土寺の僧正と云々又山槐記小安元元年八月十日建春門院密々相
摸守業房が浄土寺の御幸ありと云百練抄天壽永元年十二月四日院の女房丹
後局浄土寺の堂供養と云又大江隆兼秋日浄土寺仙窟の即事詩無題詩子見えり
十禪師社 同村銀閣寺の門前あり祭神山王十禪師是右あり古浄土寺の鎮守あり
今當村の生土神と稱居南向并ハ所明神の社あり村中ハ十禪師と
いふ田圃の字のり地あり是此社の旧跡なり 其餘若宮の馬場佛眼寺堂の後
西方院旧跡 右神社の北あり合林と号り天台座主記云後一條院御宇寛弘四年
十二月九日院源僧正任座主位 西方院云

東山二六十一

大樹蕭々秋
帶風
無如猿太各
稱雄
獨有玲瓏數
拳石
從君建置
園中
賴山陽



東山
慈照寺



銀閣寺

浄土寺村の東山の麓あり本寺慈照寺俗に銀閣寺と称し禪宗済家相国寺の末寺なり十刹の一なり夢窓国師を祖とし寺領三十五石

佛殿 南向釋迦牟尼佛 座像二尺許中正院日護の作

東求堂 右方丈の東より足利の尊像一尺許両手蓮華をさぐり三尊佛を安置し應仁の兵起り二尊を失はれ云

慈照院義政公像 長三尺四寸許木像なり

尊牌 高一尺二寸許 銘云 慈照院殿准三宮喜山寺位 御自筆倚子の下立

中央花鳥の画 東山殿の同相阿弥の筆 上段より水引の濃蒸の印金なり古渡りく世小稀なり奇物なり

佛壇の後北の間の壁白張なり 松木小窓の鳥の墨画 狩野永納の筆

同東の茶湯の間の四畳半なり 東山殿の物数奇なり 茶亭四畳半の温縁なり高貴の賈客常小集會あり茶道したの 和漢の奇物なり

二重高閣 東求堂と前遠くは去る 北山鹿園寺の金剛像 是と銀閣と名く 心空殿 高閣のこきふ 潮音閣 日下と

三間半南北四間木より 観世音 座像二尺許 護國廟 八幡大神と祭る高閣の傍なり

宣胤卿記云東山慈照寺鎮守額平岡八幡の額を寫し候と室町殿仰せ

故の實久卿書 三字八幡宮云

分界橋 岡の前小 迎仙橋 池の中嶋より 濯錦橋 臥雲橋 共池の

龍脊橋 滝の瀨下 仙袖橋 仙桂橋 共東求堂の 落照岡 池の向あり

向月臺 銀沙灘 客殿の前あり白砂を 細川石 畠山石 山名石 共管領職より

大丹石 周防の奇なり 浮石 座禪石 共小池中より 龍蟠石 蹲虎石 卧牛石 伏虎石

點頭石 布袋石 天柱峯 回雁峯 香爐峯 共其名の形小 北斗石 落星石

壽星石 濯纓石 謝公塢 共故事を以て 爛柯石 鉤月臺 仙人洲 白鶴鳴臨

湖臺 仙草壇 其故あり 都々當山 足利八代將軍義政公の別荘東山

殿より茶道相阿弥台命を蒙りて造り西庭の風光真妙なり山水の法も母時

壯觀足らばい事外未代庭造の軌範なり洞庭西湖も掌小握り松鳴象

瀉も眼前たゞ壺中山川を縮め一粒の粟中小日月を蔵りたる神仙の術

有と見えたり 御茶水 東求堂の北より清泉の流れ東求堂小通より

前相國寺舊中禪師碑を建てる其他林泉名勝委實甚夥

山川名跡志云是下先義滿公北山の山莊小金閣を造りて是を准々此小閣を建
其の然りしを銀閣と號せしが義政公薨るに給りて銀閣を毀れりて其の跡を
其の跡を見頭とて不審とて之を云々又同書云銀閣寺の四疊半の慈照院公
の制作ありて茶亭四疊半の濫觴なり然るを茶亭の時其列座の客預り至
る所を傳へて云其時其所に掛物立花ありて昔以亭小集會有り器
品を云の宮門主撰家清花堂上の面々又高臣を指し其時山名細川武衛等の
人も其所小候一公の喫席ありて座一たきしめや其往昔を觀て誰か感情を生
せしん哉
中云云

太平時節守成難豈科兵戈起宴安
兩腋風生銀閣上隣君盡日倚闌干

太平純

寂寞將軍廟無邊草木肥
苔深過客火松卧古人非
流水幾時盡行雲何處歸
長嗟山路暮幽鳥傍吾飛

那波方

相國山莊擬帝家茶香韻事屬豪華
雕甍藻井銀閣錦石朱欄玉作沙
興廢當年蕉覆鹿招提今日柳藏鴉
淒涼不獨前朝跡禪室亦悲落照斜

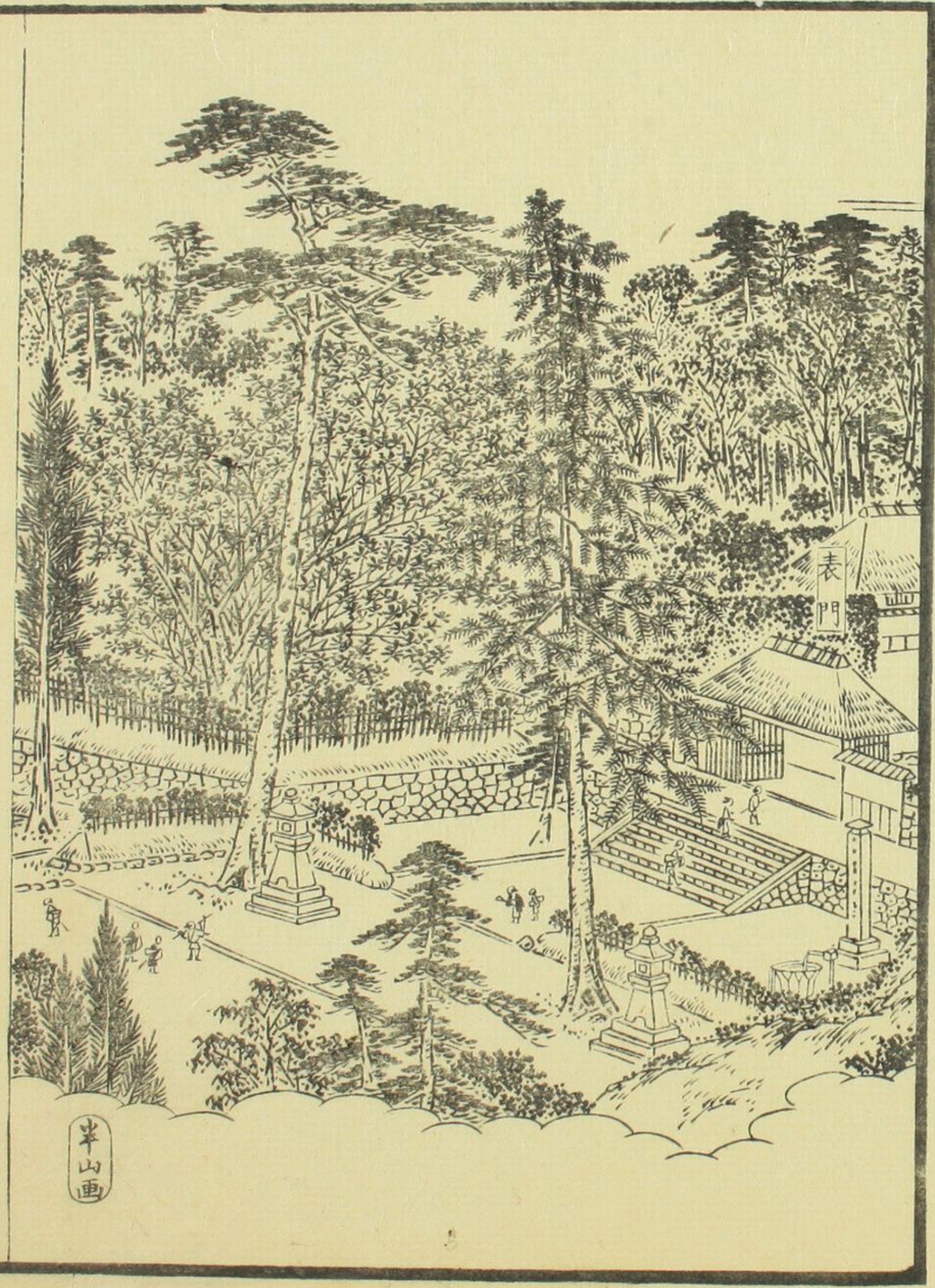
江郎綬

東山二ノ六四

吉田政やい人銀若のたも集芳軒や茶湯時
るだりかたはひをれおのづか月待山の首おあり
石も本も時代の若やあまはる

橋本
経亮
西吟

萬松院殿塔 當寺ふあり足利十代將軍義晴公の墓なり
天文十九年五月四日薨り壽壽四十道照睡山と号り
穴太記云五月廿一日あり御葬礼の事あり云々東山の麓慈照寺の内小葬
場の普請と出で代々の御葬礼北山等持院あり有し今乱きたる世の
中とつひ城日傾入城の御更をの御心おかけられ御いさむの末ねは
城山の麓あり葬礼と云々城山と云々如意吹のこり奥と云々出で
慈照寺山城 銀閣寺の卯辰の同九云町あり義政公の遠見の番兵と置たりや
大永十八年五月七日法任院義澄公城と号り移りて
辨慶屋敷 康谷村あり法然院より北四甲あり小田の字あり
其事実詳し
善氣山法然院 康谷村あり萬無寺と号り浄土律宗無本寺あり常念仏の寺
寺領三十石元禄十六年新規小下りあり
本堂 東向 阿弥陀佛 座像五尺許
慈心僧都作 地藏堂 佛殿の前西小向五尺許あり
地藏尊と安んず紫銅の造像あり
佛足石 北地蔵尊の善氣水
客殿の庭前あり 鎮守祠 日上稻荷の神と
あり
經藏 門内の西側あり釈迦仏
多門天章賦天と安んず 浴室 日東側あり 鐘樓 浴室の上あり 門 南向萱と
あり



半山画

其二



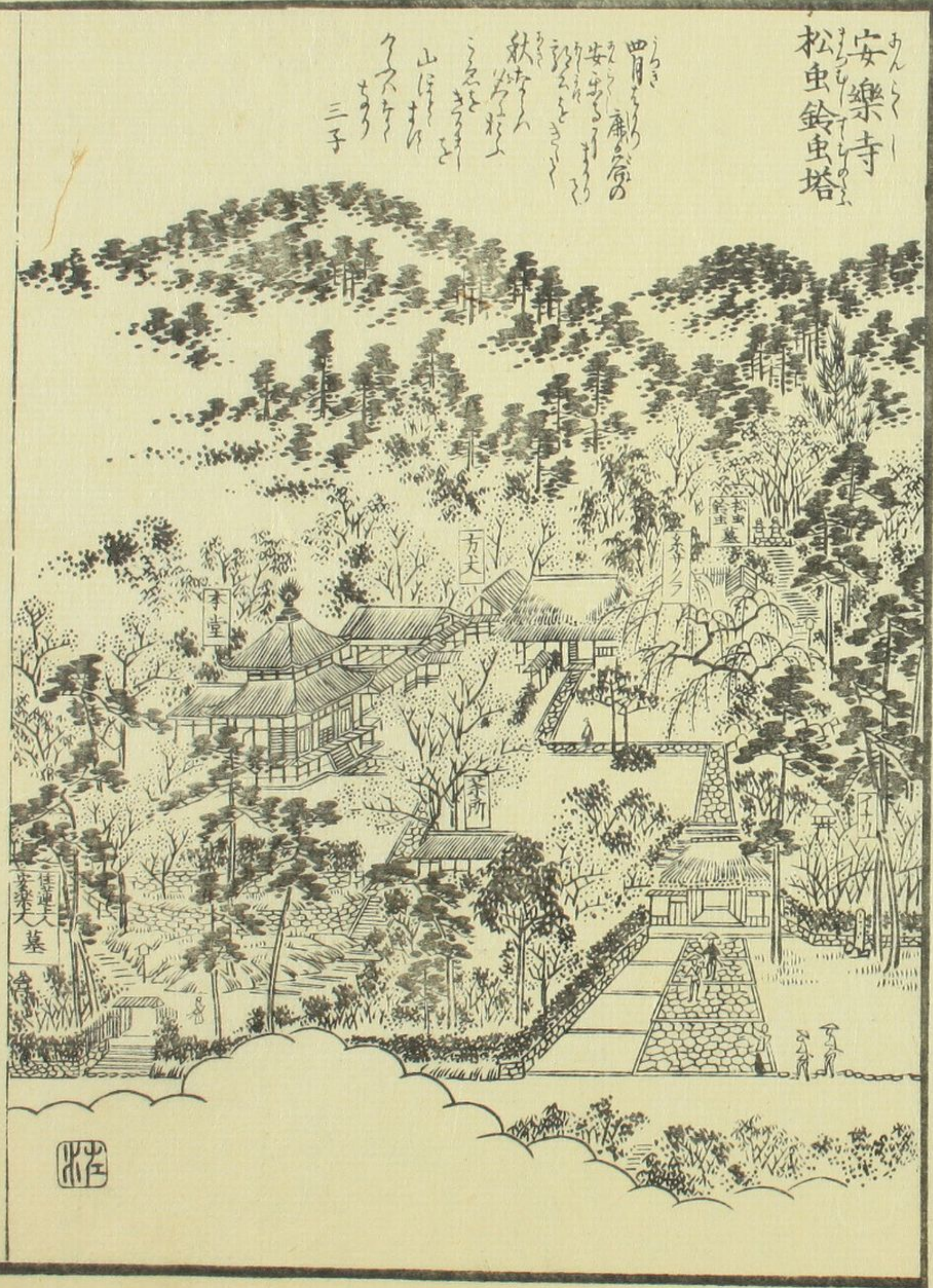
桃下
 乙卯
 河此
 寺

東山六十六

阿音王塔 口の東傍あり高凡四半許の石塔婆之沙門真亮建立せり
 當寺ハ往昔法然上人の徒弟住蓮坊此所ハ住法然上人も亦暫く極ま
 せ給ひが中絶々良久廢せしを延寶八年知恩院三十八世萬無心阿上人
 之を再興一新經藏を造立一倭摺の一切經を寄附一寺以萬無寺と号
 實此地ハ松風蕭然々々平生小鉦の音絶び六時禮讚の聲ハ幽谷小銜一
 寂寥々々々峯の月朗々々々廬山の白蓮社々々々々清淨無塵の佛界
 たり世ハ六字づめの念佛を鹿々谷流とて此寺の称名を習ふなりとて
 住蓮山安樂寺 日法然院の南あり寺境々々々々閑寂あり世塵と際々々々堂前上条橋の
 大樹あり迦筆以々々々の本住持師橋菴回霍九の碑と建つ
 本堂 南向 阿弥陀佛 座像惠心僧都の作 股士觀音勢至 とも小蓮慶の作
 松虫鈴虫兩尼像 座像一尺寸許 同 兩尼之塔 堂前東の山の方あり
 五輪の小石塔三基列
 當寺ハ往昔靈鑑寺の東上る事六町をり右の方あり法然上人如法
 念佛執行の所なり徒弟住蓮安樂の二僧ハ附屬し給ふ後鳥羽院の
 愛妃松虫鈴虫の二婦一向專修の勧めを信敬し發心々々住蓮安樂寺ハ

安樂寺
松虫鈴虫塔

安樂寺の
秋
山
三子



隨ひ大内を忍び出く此菴室小来つ々薙髮々々尼と爲り上皇これと
 逆鱗あつ々二人の僧と死罪小行ひ亦其師たる法然上人を南海土佐小
 左迂給とれ小依々以菴室永く廢せしを遣小星霜と經々後念仏弘法の
 旧跡なりとて寺院を建營今之地小移々々任蓮安樂の二師を開山と爲り也
 任蓮安樂二師塔 江州馬洲あり五輪の石塔二基列任蓮安樂の両僧ハ
 大豐明神社 江州馬洲あり大生主神と例祭九月九日神輿一基牙敷本あり
 圓城寺旧趾 右神社の辺方四町今田地と爲り大豐明神ハ圓城寺の鎮守なりとて
 當寺ハハハ右大臣藤原朝臣氏宗卿の終焉之地なり尚侍藤原淑子 贈太政大臣長
 良女 病苦小悩々々一夏有々益信僧正と請々祈禱せしむ小應驗速々
 程小淑子師檀々々發願一山莊東山椿峯西麓の家を佛刹と益信
 を住せしむ即ち圓成寺と爲り又寛平太上法皇益信僧正と灌頂の師と
 給ひ殊小御願有々伽藍と興隆一寶塔と作起一聽衆立義亦具小備
 るを歴代編年集成小見えたり院家記云真寂寛平法皇の皇子俗諱齊世

親王法三親王と号し又圓成寺官と申し云 如以圓成寺又城と作り
 左經記云寛仁四年六月十六日丙申故一條院御骨爲避方忌年来奉置圓
 成寺而依方開圓融寺邊今日奉渡
山の茶をわきとて供する小成寺の

靈鑑寺 同村谷口の左あり禪宗開基靈鑑院尼公後水尾帝の皇女たり則ち
 本堂 南向 不動明王 立像一尺余鎮守天満宮寺境の東あり

雍州府志云靈鑑寺園城山と号し後陽成院の女房持明院基久卿の
 息女妙法院宮克然法親王を産し後陽成院崩々後尼と爲り此所妙
 法院宮領地たる小依々寺を建々々小棲々後西院の姫宮身子と爲り
 谷の宮と稱し後無々遷化々今之住を千官と稱し是も亦新院の姫宮也
 神護寺旧蹟 同村の南あり今其地田圃の寺と

永亨日録云永亨七年十二月廿日神護寺御成御点心被進上云々

二水記云大永七年十月十三日今日御出張云々道永細川高目午時上洛東
山神護寺著此後大樹御上洛御陣所若王子云

又云享祿四年正月廿二日京勢吉田小打出在家少々放火也東山法勝寺
神護寺等同焼失云々律家の古所かり之を惜むべ

如意寺

靈鑑寺の南谷と隔る隣りつゝ如意嶽樓門のたゞし小有諸堂山觀
たり願基ハ智證大師坊山を巡覽しつゝ所ハ忽々一ツの庫現れ城垣と均
大師の蒙とくく岩窟とある小觀世音の像像現然たり大師志をく歡喜する
當寺の本尊とくく然る小觀世音の世滅七一久一荒廢の地となりと靈鑑寺
巨公の再興ありつゝ旧地の蘇今の所ハ堂とつゝを

同

靈木杉本堂の後より希代の
大木中々若杉なり鹿宮杉の傍に
關知井日所あり
寒暑僧威

古蹟右門所より九六甲あり上あり山州名跡志云如意寺ハ園城寺の別院なり
當寺の本尊如意輪觀世音ハ今三井寺の南院の内觀音堂の本尊と見ゆ

三井寺如意寺記云如意寺ハ長等山最高き所峯と如意寶山と名
又正當山と号以此峯正小王城の東門小當ると以名々東三井の上より

西洛東鹿谷小至る高峰一帶行程九二十里南垂藤尾小止る北方小峰
陳列志賀山小接く其間堂舎僧房鱗次相列る又云二階樓門ハ北哉

園城寺西門とり左右廻廊門の南ハ瀑布あり仍ハ樓門の瀑布とり
坂下一里ありまる鹿谷惣門ハ至る左右ハ垣を築く云

山州名跡志云関白太政大臣基忠公の子大僧正道珍當山任職也是則

三井長吏南院也と云又保胤入道寂心陸陽師賀茂忠行ハ子ハ慶隆の保胤
出家の後内記
上人と居住ハ參河入道寂照寂心を以師と同く此寺ハ住ハ保胤

入道寂心長徳三年東山如意輪寺ハ終と續本朝ハ往生傳ハ見える

真如堂縁起云向阿上人本園城寺の住侶淨華坊證賢と無双の碩

學なり然る弘安十年行年廿三あり發心ハ離山ハ如意寺の大門ハ柱ハ書付る

此ハ鹿谷の名中ハ禁ハ鹿谷村あり名義詳ハハハ按ハひる如意寺の縁起ハ二ハ鹿の出

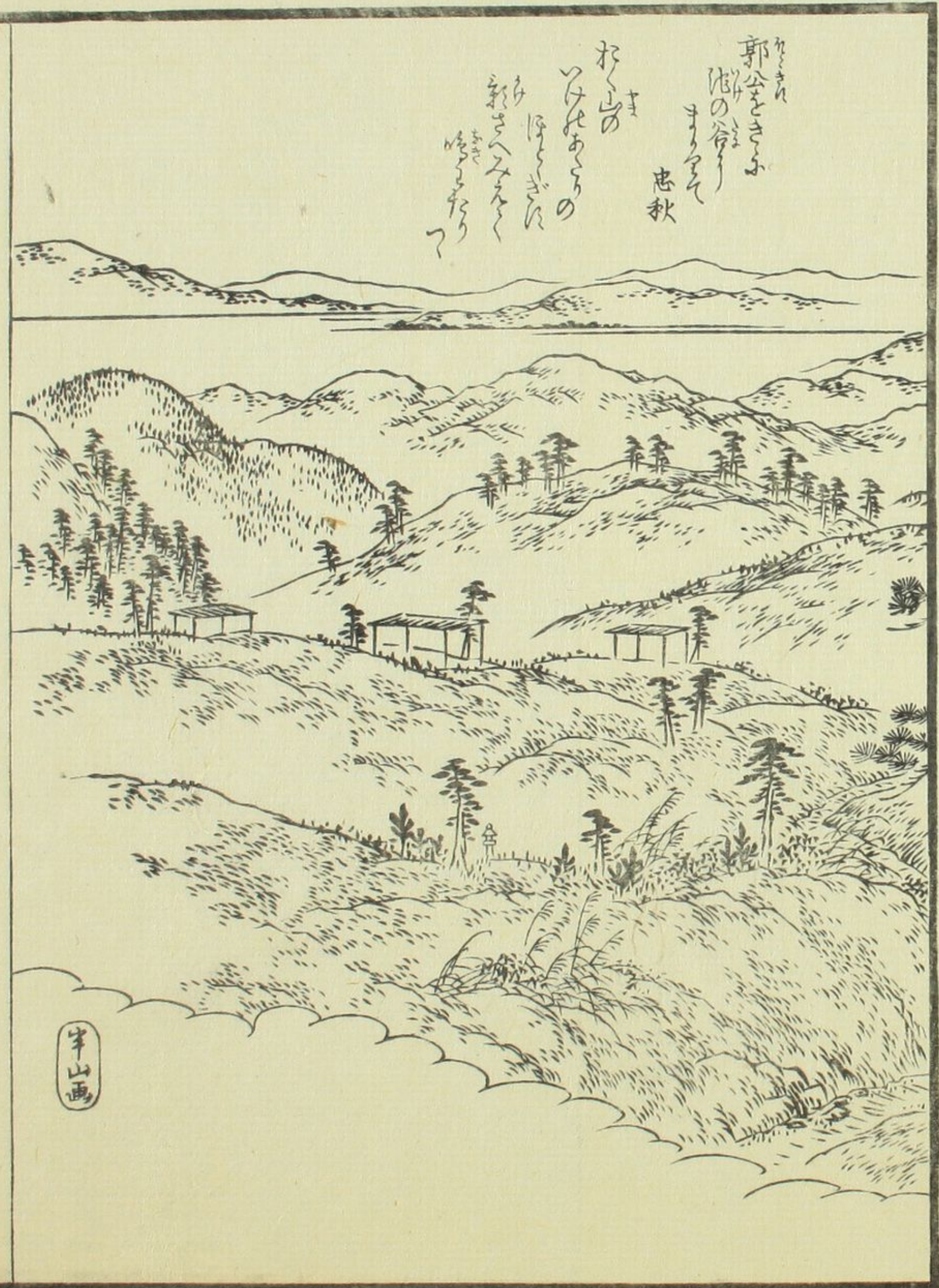
鹿谷

談合谷

日山中の名中ハ禁ハ鹿谷村あり名義詳ハハハ按ハひる如意寺の縁起ハ二ハ鹿の出

盛衰記云東山鹿谷とり所ハ法勝寺執行俊寛僧都ハ領也後三井寺

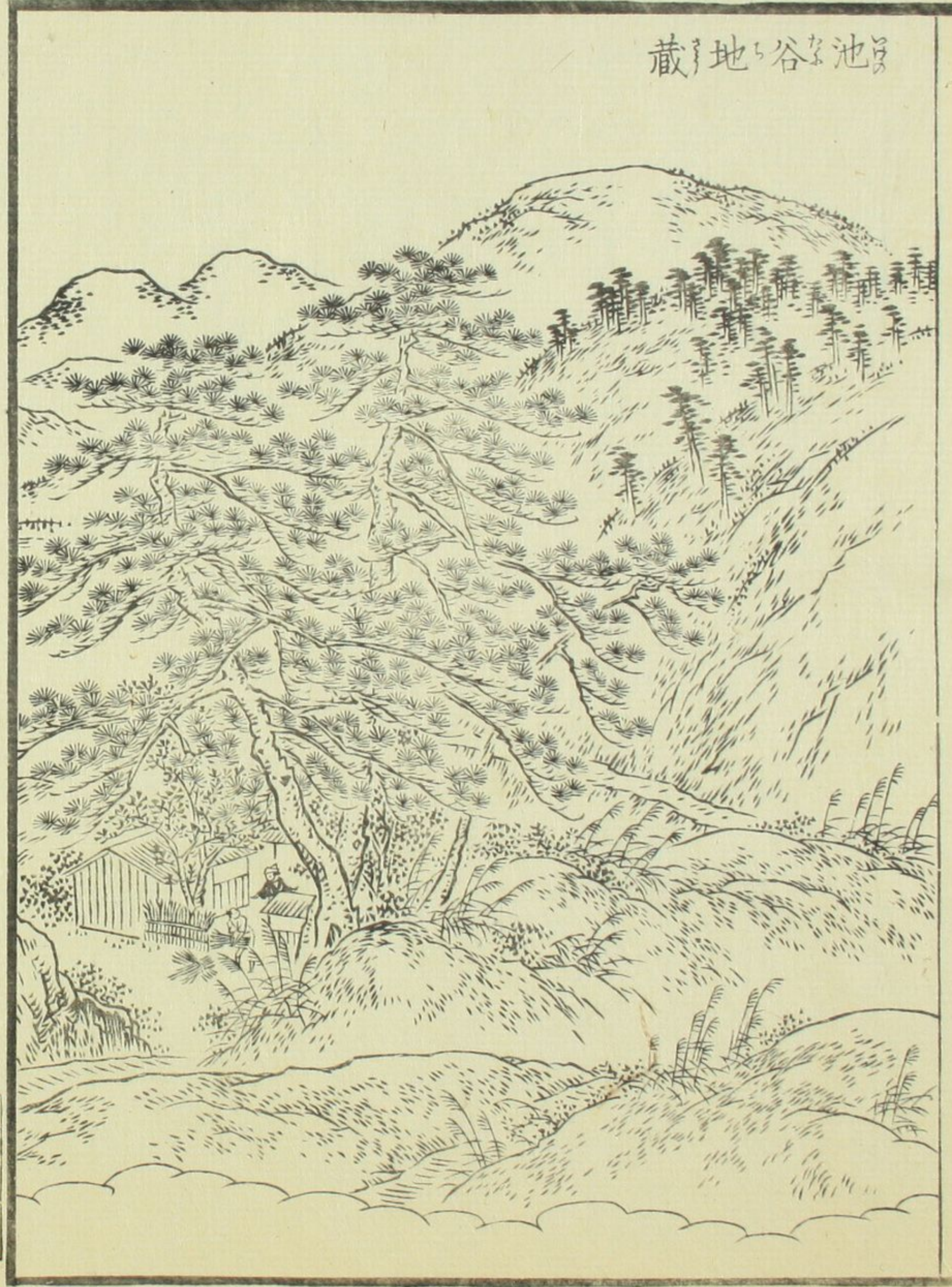
平判官康頼ハ波沙將成徑平家を滅び謀を企て遊宴ハ事ハ密謀ハせり所ハ談合谷とり



郭全とさふ
 池の谷
 忠秋
 お山の
 つひはあらの
 呼ぶき
 新さへんさ
 鳴るる
 つ

半山画

池谷の地蔵



東山ニテ七十

續き々如意山深く前の洛陽遙不見渡々而も在家を隔たり爰ぞ
究竟の所なりとて城郭を構へ兵杖を用意以云々
平家物語云東山鹿谷とて所ハ三井寺小續くゆりて城郭を有る
其小俊寛僧都の山莊あり彼所ハ常々寄合て平家を亡け討略を巡らる

法勝靈區倚翠微寛公謀國事空非

芥煥

千年寶位長無恙萬里投荒獨不歸
蛭骨一擊童子手斂珠幾瀉老僧衣
祇今談合猶留谷精舍重逢佛日輝

巖葵

寛公別墅已泯然慷慨爲惟壽永年
寂寞談溪風雨夜水聲添恨轉溪溪

帝命曾將付龍臣源平戰鬪迹俱陳

釋淨壽

計疎纒漏獅溪上譴重遙投鬼界濱
寂寞池園虛日月焜煌臺殿委灰塵
徘徊寧忍傷情地恨殺前人哀後人

尾古重伴

ひびびつと志が谷の岩清水もれ遠く流るは

樓門瀧

談合谷の上あり前小如意寺の樓門あり有りとて斯ハ名づく

龍王祠

旧所如意寺の伽藍趾より乾の方二所許あり是より三井寺小至り行程二十所

葵谷

龍王廟の東あり秋所山城近にの

千石巖

葵谷の左三所許あり岩の形高く依物千石と積上し如く

池地藏

日所の西あり山中地藏尊の小堂あり秋所ハ時鳥を聞の名所也洛下の雅客

中尾山城蹟

前小銀閣寺方松院の塔の傍下より山城跡あり城の音を聞樂む多

穴太記云天文十八年十月廿八日先慈照寺の大嶽中尾とて山小鋏とて
はせられり同十九年二月十六日又御普請とて程を造り出せり此城山

高き一尺の白雲嶺を埋む谷深し方仍の青岩路を歩む九折を道まをりつゝ登る夏七八町南に如意嶽小續き尾崎と三重小堀切二重壁を付く其間小石を入り構丹を目の下に見たり誠小見夏小作出たり云

如意嶽 鹿谷の東にあり峰より三井寺小つゝ路あり是を如意越と云麻谷より

山城志云如意嶽の鹿谷村の上方丹嶮空小聳へ兀立嶮絶は山中寺跡多し佛堂僧舎千宇幾々今盡く焼くと云

諸社根元記云平安の帝都へ天上の名跡を顕せり國を東に當つゝ如意嶽あり日神岩戸を出させ給ひ其御光頭れ出たり々々城八百万神悦び皆意の如くちると宣ひし如意山と名付く云

本朝神仙傳云慈覺其入滅の期及んく忽然と失ぬ所在を知り門弟相待擁を如意山の谷小落其餘を見び云

異本應仁記云文明元年五月多賀豊後守高忠如意嶽小陣江州小通

び云々斯くハ鷺杜の通路留るべと云

毎年七月十日の夕方京師の山中送火を焼度敷あり就中此山の

大文字の形勢道壯々の地尤高嶽あり連珠の如く燦然と明ふ

赫然と赤い他の火小比ぶれば大勝り土人傳く往昔以蘇小淨土寺とて天台の伽藍あり本尊阿彌陀佛一とせ回祿の時此峯小飛去王光明を放ちて是を慕ふ本尊を元の地安置夫より于蘭盆會小光明の如くを作し火を燈しる後弘法大師大文字小改めし星霜累々文字の跡も壓れ公慈照院義政公相國寺の横川和尚小命せられの如く小作らしめり云

山州名跡志云相國寺横川和尚と將軍の臣芳賀掃部と兩人作る所也

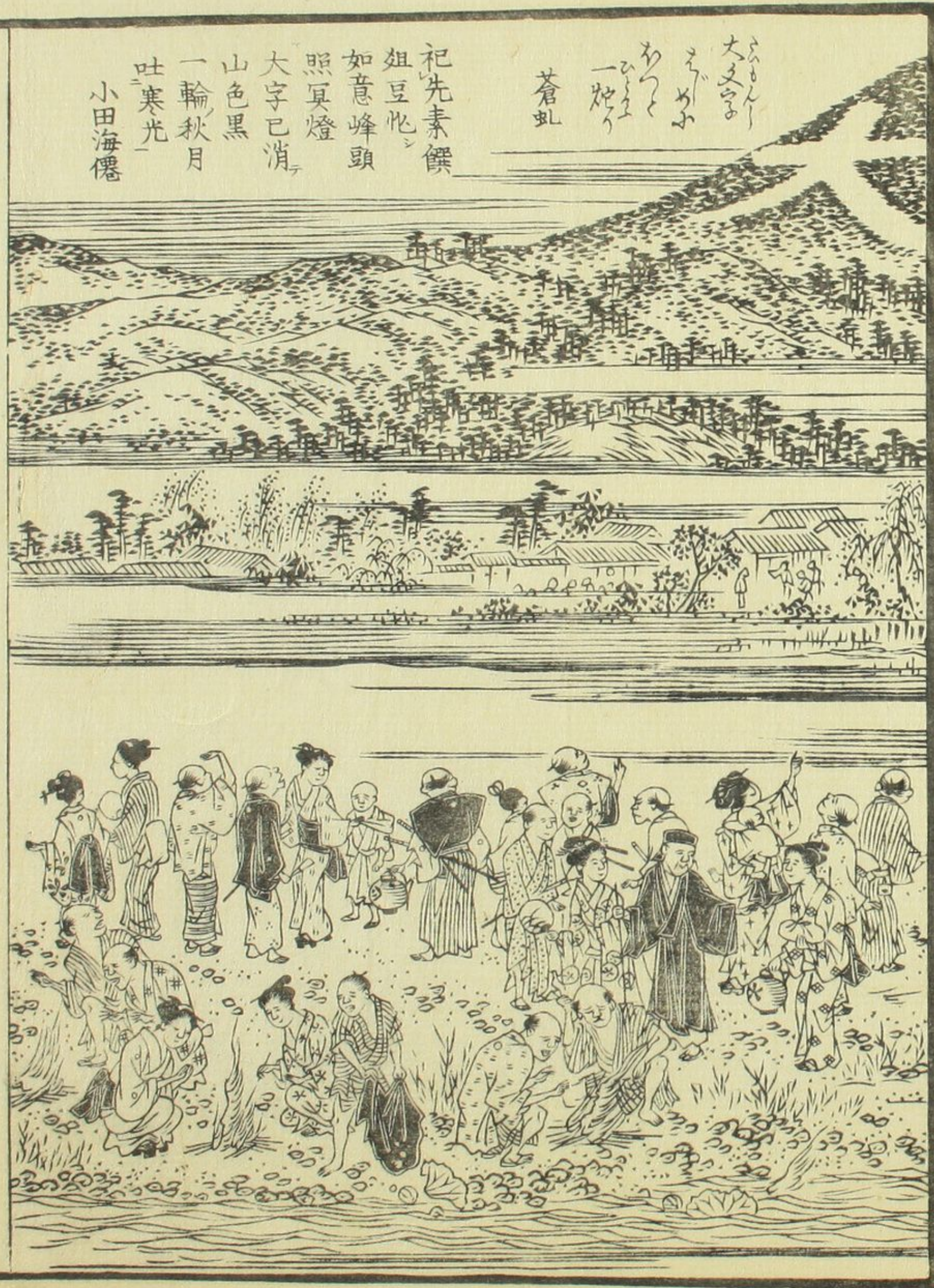
雍州府志云毎年七月六日慈照寺淨土寺兩村の民山小登り松木を伐りこと長さ二三尺許家小飯り細小れを割日小乾り同十日の晩小至り各此薪を携へ山小登り山の西北の面小大の字の跡あり是弘法大師の畫

まら所より所を小石を以て徴し各合し之を視る時ハ則字畫分明

かり九大の一字横の一畫其長さ四十間小及ふ其同炬火十三箇余なり

祀先素饌
 俎豆化
 如意峰頭
 照冥燈
 大字已消
 山色黑
 一輪秋月
 吐寒光
 小田海僊

大文字
 一燈
 蒼虬



七月十六日
 大文字送り火



九太郎通橋

春翠

東山二ノ七十三

左堅の一畫八十間餘其間炬火三十箇右一畫六十八間其間二十九箇
余たり携へ来る所の薪木前ふ所謂徹と云ふ所の小石の上積置き同
時ふ火を點じ其光分明赫奕たり之を亡魂の送火と云洛下衆人争う之を觀る云
伊藤東涯七月十六日火を觀るの詩云青山爲紙火爲墨點々綴成象
物形日暮峯頭何所似却疑字舞列唐廷紹述自注云京俗中元の
後一日城東北諸山炬を燃ひ或火坑を穿ち點々相連了物形の文字成
爲り因て想ふ唐世云と云字舞と云者舞人若于地小垂く太平萬
歳等の字を成り想ふ亦此の如故三四之小及と云々夕の日雪の朝
此文字の跡小雪積つて洛陽の眺と云る是を雪の大文字と云
大文字蘇谷直祿云毎年七月十日の黄昏洛東浄土寺村如意嶽の山上小燈を
作り大文字ハ弘法大師の作り云傳へたり云其運筆字勢の妙絶たれ
教ひを予彼村に住親村長同第一の畫長サ三十八間第三拾五間第三拾
同火の數七拾五其中央の所をカナワと云山は雪を薪を積めりを見
生松の小刻を以て此の如く積立枯松葉を差添へて火勢を助る其體を護
摩旅不用檀木助刀小異たり思ふ山の上用ゆる柴松護摩の根原たり其地
夏炳然たりまじりの七拾五の火場皆穴あり唯平地を焼く草木を生じ
故ふ焚時諸出殺生の患ひを又冬日の雪相よる雪の大文字を頭と云人目を

驚教せしむる大師秘密の加持力を以て山祇王誓ひ後葉まて結界を
たゞめざらん忌服ありを甚く憚るるを一家小僧用ひて忽ち崇りて受
りて十歳の今も顯然たる神祕の密法を下民に示し人多く想ふ七月十六夜ハ
此大文字を拜し祈願あり火を奠り以義經送るる所見たり其時黒素其由縁を
七霊の送る火と云諸國は火を奠り以義經送るる所見たり其時黒素其由縁を
知らざりし月元且八月月日時皆陽數たり當夜ハ則其裏より黒年黒月黒日
黒刻あり天下太平国土安穩の祈禱を置り思ふ此夜又北山ノ船形と
せり火ハ則異船燒の表あり蒙古異賊を調伏の護摩火たり其蹟を
山川の神々捧げんと御燈と云る異形若葉の例を換へたり御燈送拜
の書經神典に見るべし其國ハ古風七ひく皇國ハ今も所送拜の例あり
夏ふありや斯く思ふ村人カナワと云の傳へり所ハ城守用ひり鉄輪の四比あり
て其ハ往昔弘法中天下飢饉一疫流行せり夏あり大師其頃より鉄輪
を中央に置り上下左右七拾五の火を添へ大の文字を作り改り明も七月十夜ハ
村人の勤め来りたり其古ハ相當の下行を賜りつれども數百年來其能
未達き其事絶えり予火氣の早く衰へる夏を數き年々薪の助力を
せり同志の人御あつて城助力をあつて因ふ云同く久松崎
の山小燈火ハ妙法の二字是ハ日像上人大文字を假りて作りしと必せり
大文字ハ足利將軍家の時始りたりと説く金岡寺山より大文字の夏あり
其と籙島の都名不圖會銀閣寺の所に出せり甚く誤り此如意嶽の大文
字ハ弘法大師の御作たり其筆法點畫の微妙なり何者かまのふんらん
実小千歳の今小柄然たり拜見しとるるを予深く貴ひかるといふ
あり聊言を述るふん

詠東山大文火

何人巧思畫山成村炬秋輸一夕明
巨華飛丹光的歷積薪焚翠勢峰嶸
烟舍遠影浮息水雲伴昏星落鳳城
清賞由來片時散空餘孤月照三更

皆川愿

巖垣彦明

七月既望天氣清綠鴨河邊月未生
東山一片消雲霧爽爽秋樹帶夕晴
西岸樓臺十二欄置酒有待正整歡
南北板橋人如織風飄綺羅起彩瀾
彩瀾漫浸淺水濱蕪麻沈瓜拜祝頻
知是孟蘭盆會罷携來行典餞送神
忽有一炬登翠屏如意嶽面烟吐青
依微火色且隱見恍疑曉天橫參星
填坑柴薪發光明斯須滿山輝熒熒
熒熒一百單三點三畫橫斜大字成
游賞萬人相追隨百里遙望祭離離
豈帝書聖入石燄更驚高僧彌天奇
一時摸倣勢靡然競賈餘勇正煽煽
西山慈航北妙法看同兒孫侍膝前

東山ヲ七十五

韓國燈樹趾驕奢赤壁明月遜光華
韓國赤壁何足道海內奇觀獨堪誇
君不見見室町幕府全盛年城北梵宇
駭聳天車馬雲簇寶池畔微風香動
萬朶蓮東山炎文照映時將軍倚欄
興熙熙豪華祗今成夢境二百餘年
韻事遺

幽石軒記

如意嶽少少の山づみのわがやとせん相國寺の
大との文字一つを答奉るべく奉りてせん月のそと
の表具小窓を揚ぐ宮のまゝ屋もあき望まむむら
世は目ゆき草よき岩倉花園加茂少ふつき目録
流しやれん電岩の空ふかしくと突入るるをほそれ
あつらの山さくら九室のへの御垣をてむ羅の大宮
りをまほなき國原たりそりる各う田の丘つぎまけ
この庭下せの物ふ林の中よりひしへ出り薨らたる
とら造るるん城見ゆれあたるらつゆるのほらまは
はぞや人のまへへへ
落玉のあはれ小見れば山居の流へも跡ちたつるを無腸居士

如意の岳の火大文字をりく
 山の名を焼く代りあると東山名に記す本火も造り
 山の端を雪に思ひや大文字
 薄雪や大の字かおる梅室草
 大文字の火よ全部をあきのう
 梅室の火や先づ山の大文字
 大文字やあきの字も唯ちね

雪臣
 嵐雪
 其角
 蒼乳
 梅室
 蕪村

東山名勝圖會卷之貳 終

